# 作東の文化

No.47

作東文化協会

# 作東の文化

## No.47

洋画「晩秋の日射しに」山本加代子

令和3年10月

題字

真野みよ子

表紙写真

題　「伊根の船屋」

洋画　尾崎千代子

表　紙　説　明

伊根の船屋は漁に大切な船と共に住を構へて生活が成り立っている。港内の先まで続く家は何処も皆な家の中に船の入口があり漁に出る。また雨風から守り日本の漁業を支えた。伊根浦伝統的建造物に認定されている。

船屋みな　間口は海へ　夏の雲

# 目　次

**巻頭言**
縄魂弥才
―谷あい暮らしの誇り―山下　亨……1

**特別寄稿**
米寿を迎えて……横山　猛……3

**所感寸言**
底樋
―稲作文化を支えた技術―長瀬真澄……6
変化する敵……井上健一……7
現金見てないわ事件……鳥形初美……9

**随筆随想**
生き様……日笠一成……12
芳英小学校の校歌……片山武範……13
Think　Right　誤った先入観を捨て、より良い選択をするために……安東公一……15
ありがとう……山　さくら……16
大日つぁま……井口祥子……18
俳句事始め……山本宗雨……19
今だに百姓一年生……影本昭子……20
私と書……長家豊丘（豊幸）……22
災害の記憶を将来に……有友一正……23
異文化との出会いから……島根政一……25
田舎暮らし……浅田年史……27
ろくろを挽いて十六年……永野宜治……28
出雲街道……延原順子……30

**歴史紀行**
豆満江……圓東光夫……33
粟井中村銀山の今昔……粟井睦夫……34
明治政府の策略……井上健一……37
峠の文化を訪ねて……橋谷田岩男……39

## 短文芸

### 俳句


夏茶碗……樽井悦子……43
折々に……杉本幸子……43
雨風……沖田はるみ……44
風花……春名はるを……44
風まかせ……豊田絢子……45
春の暮……尾崎千世……45
清水……坂井はつ子……45
孫の目……山下三景……45
時鳥……井口祥子……46
雁木坂……山本那実……46
夢千代……小林友子……47
しずり雪……菜穂……47
青芒……山本眞由美……47


### 川柳


暮らし……影本守……48
時の怪獣……五反舎……48


### 短歌


金魚……近藤美水……49
コロナ予防の注射……坂井はつ子……49
女傑たち……中村千州代……50
米寿となりぬ……宅美とみ子……50
夫の腕……岡田仍子……50
今日もまた……平瀬芳子……50
友よ……土井つゆ子……51
風の音……渋谷友香……51
ブラジルにて……島根和江……52
願望……山下照夫……52
昭和の歴史……福島美智子……52
料理する孫……丘野道子……52
山路来て……須田紀秋……53
折々に……杉本幸子……53
孫の一日……佐々木美奈子……53
乾杯をする……山本美枝子……54
宇宙人……和田眞佐子……54
子供歌舞伎にお祭りに……名部みどり……55
秋の風……鳥形多津枝……55
たんぽぽの花……井上さかゑ……55
我がめぐり……松井洋子……56

ふるさと……末宗玲子……56
コロナ禍……黒石初江……57
杉坂峠……入矢敏江……57
夏に生まれて……浜田くに子……57
初咲き……日下智加枝……58
散歩……新田千晶……58
あるがままに……豊田絢子……59
曾孫は二歳……小林洋子……59
侘び住まひに……角利津……59
初夏……山下三景……59
空襲に遭ふ……三浦智江子……60
丑年にして……関内惇……60
作東文化協会グループ紹介……61
令和二年度　作東文化協会事業報告……65
令和二年度　作東文化協会決算報告……69
作東文化協会会則……71
令和三年度　作東文化協会会員・役員名簿……73
編集後記……82

# 〔巻頭言〕 縄魂弥才 ―谷あい暮らしの誇り―

会長　山下　亨

田舎暮らしを望む人が増えている。都会のコンクリート住宅で育つ子どもたちは「トンボやカエルのいる田舎に行きたい」と言い、大人も山村の「ポツンと一軒家」に憧れに似た関心を持つ。近年、自然原野と触れ合う暮らしの価値が再評価されている。豊かに見える自然だが、「ここではまだヤマメが釣れるけど天照（あまてらす）の頃からの魚はずいぶん減ったよ」と老爺のつぶやきが聞こえる。確かに川魚の数も種類も減り、谷あいでもドジョウやタニシを見かけることは少ない。それでも山裾には鹿や猪、タヌキ、キツネ、ヘビが棲み、空にはカラス、トンビ、スズメ、ウグイス、山野にアゲハチョウ、モンシロチョウが飛び、時節ごとにツバメ、ホトトギス、ヒヨドリ、ジョウビタキがしばらく暮らしていく。夏の夜には無数のホタルが飛び交いその畔や野には七草、ヨモギやフキ、タケノコがゆたかに生え続けている。そうした身近な動植物たちは、遠く縄文の狩猟採集時代からわたしたちの祖先と代々お付合いをしてきた子孫である。

約一万数千年続いた縄文時代だが、宮沢賢治（「なめとこ山の熊」）や柳田国男（「遠野物語」）だけが縄文の語り部ではない。美作地域の高地や谷あいでも縄文の民が川魚を獲り草木竹を食用・薬用にし焼畑から食料を得るなど自然と共生する高度な知性と「利他」の精神（縄文魂）によって賢く生きてきた。また、天に近い高山や石・木に宿る精霊を信仰の対象とし、後山山系・ダルガ峰では父祖の死霊を祀る信仰があったという。各地の縄文土器類や建物遺跡類などから縄文の民の高度な宗教文化をうかがうことができよう。

ところが、大陸から製鉄、文字、稲作などの文明を持った民族が入ってくると縄文生活は大きく変容し、

弥生時代が到来する。美作地域では物部一族らが川・山の砂鉄を使うタタラ製鉄地を広げ、砂鉄や炭焼の土地を求めて山間深くに人が入り定住化も進む。「日本にはどの山や谷間にも民家がある」と外国人からよく聞く由縁がここにある。砂鉄を玉鋼に豹変させる「神の仕業」は、山岳宗教（修験道）を生む一方、分業化した鍛冶師が鉄製の農耕具・土木建築道具を進化させて農耕定住社会の基礎が築かれていく。

いつの時代も地域発展の要は往来（道）であった。長く山間地の往来は高山の尾根をスーパーハイウェイとして使ってきた。今から千五百年前の飛鳥・白鳳期に伝来した仏教によって国づくりを急ぐ都は、西播磨―美作―出雲へ直線に伸びる往来（官道）を整えていくが、これが古代の美作（作東）に文明開化をもたらしたというのが私の見解である。官衙（郡役所）や寺院が建てられ、祖先たちの大勢がその労作に参加しハイカルチャーを受容した。日指・毘沙門天、山手（大海）・土居・竹田・江見（閻武）などに白鳳期の仏教文化の華が咲いたのである。こののち、各地に往来が伸び稲田が開かれ豊かさの増した中世・美作の国は名勝地となり、北から大伴家持、南から法然、東から平家一門のほか後鳥羽上皇や後醍醐天皇、西から寂室元光（禅僧）など歴史上の人物たちが往き来していた。

朝廷支配から武家支配に変わった戦国乱世を経て近世へと移り支配権力者が変わるが、ここの生活者は縄文の高度な狩猟採集文化を維持し災害に堪えつつＳＤＧｓの農耕文化を発展させてきた。ちなみに、梅原猛は「縄文の精神文化の基礎の上に大陸伝来の弥生の才能を積み上げて日本人の原型が作り上げられた」と「縄魂弥才」論を展開し、他方、ある宗教学者は「縄文魂は「和を以て貴しとなす」と「篤く三宝を敬え」の二つに受け継がれている」と指摘している。いずれも参考とすべき文化論である。

ともあれ、縄文の心とハイカルチャーの受容によって歴史を紡いできた谷あい暮らしの誇りこそが作東の農山村文化の原点といえるのではあるまいか。

# 特別寄稿

## 米寿を迎えて

特別顧問　横山　猛（歌人）

四月の初め、筒が一つ届いた。中を見ると全国連合退職校長会からの米寿の「祝詞」であった。ああそうだ、来年の一月二十日には満八十八歳になるのだ…それを記念して何かをしなければと考えついたのが「第四歌集」の編纂である。（出版予定は令和四年末）

毎月、三十五首を詠んで、清書をしているのは二十五首である。第三歌集は、平成十七年までの作品なので、今回は、平成十八年から令和四年までの作品を掲載することになる。とは言っても、一年間の作品数は三百首であり、十七年間では五千百首にもなってしまう。第三歌集では、一年分として三十首余を選んでおり、それに従うと、十分の一しか掲載できないことになってしまう。平素の暮らしの中で「断捨離」がなかなか出来ないのと同じ様に、短歌も、折角詠み上げたのだからと切り捨てることは難しい。そこで、多分これが最後になるであろうと百首余（一年分）を選ぶことにした。とは言っても、切り捨てる事は己の身を切るような思いであるが、やらなければ膨大な歌集になってしまうので、毎日毎日、必死で切り捨て、現在、令和二年までの選歌が出来たところであり、次に記すのは、各年の題と、その見出しとなる作品である。（旧仮名遣ひ）

田舎に生きて……平成十八年

自然悠悠青葉悠悠庭巡る我も悠悠田舎に生きて

日を重ねては……平成十九年

ひたひたと迫り来る闇払ふがに罪払ふがに日を重ねおり

何も無しと雖（いえど）も……平成二十年

何も無し何もあらざりわが身には咎（とが）も功（いさお）もはた望めるものも

後期高齢者となりて……平成二十一年

泰然と優先座席に座しをりぬ我こそは後期高齢者なるぞと

五十年共に暮らして……平成二十二年
五十年共に暮らして省みることの多かりわが暮らし様
喜寿を迎えて……平成二十三年
一秒の重なり重なり一時間なほ重なりて七十七年ぞ
苦楽を超えて……平成二十四年
苦も楽も生きの証しと歌に詠む我らの力を侮るなかれ
始まりのありて……平成二十五年
始まりのあれば終はりのあることを知りてゐるらし黄葉(もみじ)散りゆく
励みて八十路ぞ……平成二十六年
歌こそはわが命なれ歌こそは自分史なれと励みて八十路ぞ
任せて生きむか……平成二十七年
吹く風にまかせて揺るるもみぢ葉よ我も揺るるに任せて生きむか
祝がれて祝ぎて……平成二十八年
祝ぐことも祝がるることも在りのまま受け入れにつつ綯(な)ひ交ぜとなる
耐へて佳きことを……平成二十九年
辛抱を重ねて耐ふれば佳きことの有るものなりけり耐へてし生きむ
八十四年を生きて……平成三十年
七回目の戊年迎へし我にして病ひを超えたり妻子に支へられ
「令和の世」となりて……令和元年
新元号は「令和」なりけり令日を重ねて生きむか冷雨にも生きむか
生ありてこそ……令和二年
病むことも愉しむことも成すことも失敗ることも生ありてこそ
未定……令和三年・四年

この様に歌集の編纂を進めているところである。初めは、活字印刷の歌集にしようと思っていたが、選歌をしている間に、己の筆跡を残して置くのもよいかと、ブラックインクを使って、万年筆で一首一首を書き上げている。来年まで、手が震えることなく書けるかどうかわからないが、命があれば何とか書き上げようと、日日励んでいるところである。

# 所感寸云

感想や批評を文章で表現する
簡単そうで難しい
しかし文章化されることで
新たな感想や批評が生まれる

ちぎり絵「芙蓉の花」岡本玲子

# 底樋
## ―稲作文化を支えた技術―

長瀬真澄

令和二年六月一日、美作市農村整備課から「かねてより田原の前区長から相談のあった笹倉奥池の廃止工事が国の補助事業の対象になる可能性があります。」との連絡をいただきました。私は思わぬ連絡に思わず有頂天になり「是非とも具体的に進めてほしい。」と即答しました。それからいろんな事務手続きを終えていよいよ令和三年三月から溜池廃止の工事が始まったのです。

しばらく工事車両が県道を行き来しているのを見ておりましたが、工事がヤマ場になっているとの情報があり、七月四日(日)島木材㈱の案内で文化財保護委員の山下亨氏とともに工事用の道を通って山奥の現地に入りました。

そこには、池の堤防が削り取られて、「底樋(そこひ)」(ハチノコ)が掘り出され丁寧に存置されていました。底樋は、直径五十センチ超、長さ約十五メートルの松の大木材を縦割りにし、中に池の水を通す溝加工を施し、再び組み合わせて堤体に埋め込むという、当時(江戸時代初期)の加工技術の高さを偲ばせるものでした。

私たちは思わず底樋に手を合わせました。重機のない時代の溜池造りは、人の手で土を掘り起こし、モッコで運び、人力でハガネ地を押し固める(千人突き)など、全てが人の手で成し遂げられたものでした。百姓に求められる過酷な労働であり、不屈の精神力で成せる偉大な事業であったでしょう。

近年の地球温暖化による急激な気候変化、異常気象と呼ばれる現象が異常ではなく日常化されてしまった現在、主食とは名ばかりの米作りよりも、大雨による池決壊の洪水災害のリスク回避を優先するのが当然となっています。有頂天で即答してしまった区長の私は、少しばかり、いや、大いに後ろめたさを感じた次第です。

山下氏によれば、この池が完成したのは江戸時代中期の享保年間(一七一六～一七三五)。稲作先進地の田原村では、溜池造りに加わった村の「皆の衆」は、自らと代々続くべき子孫たちの幸せを思って完成を喜び

涙したことでしょう。それが、三百年後、まさかの邪魔者扱いになるとは想像もできなかったと思われます。

田圃の耕作面積は減少し、それと比例して池の管理能力が不足している現実、それは、我々現代人がムラの農業の将来を見通す力(知恵)が不足しているということなのでしょうか。

300 年前の底樋

廃止とした古い溜池を撤去する現場にいて、農民の命でもある田圃の用水を蓄えた古い溜池と農夫の知恵の結晶である「底樋」の姿を見ながら、慌ただしい現代の日常の中で私は複雑な想いを馳せたのでした。

# 変化する敵

井上健一

一昨年から始まった新型コロナウイルス騒動は、未だに終息がみえない状態で、厄介な事に、最初に確認されたウイルスから徐々に変化を繰り返し、強力になっていると聞いている。細菌がワクチンに対抗できる勢力にと、変化していると言う事だ。改めて恐怖を感じている。徐々に変化する状況は新型コロナに限った事では無い。最近は新型コロナ拡散の陰に隠れたインフルエンザを例にとると《A、B香港型》や《A、Bソ連型》等の呼び名があるようにインフルエンザの菌も徐々に変化を繰り返している。わずかの変化が、ワクチンを使用して造った抗体の防御力を弱めているそうだ。

新型コロナでも五月中旬から変異

ウイルスによる患者が増加しているとも聞いている。

死者や重傷者が世界中で猛威を振るう新型ウイルスの拡散防止の方法は、確定はしていないが、人の動きを抑制する事が有効だろうと思われている。

会社に出社せず家庭内でパソコンやスマートフォンを使用しての仕事方法も増えている。さらにズームと言う方法を使えば、家庭内から世界中の会議や、研修会に参加する事も出来る。新型コロナの拡散で、にわかに脚光を浴びた方法だ。

しかし、パソコンやスマートフォン等の電子機器が、著しく普及する事に比例して、犯罪や迷惑行為も増えている事にお気付きだろうか？これも感染力が強いので、別名コンピューターウイルスとも呼ばれている。

パソコンやスマートフォンで、拡散されるデマも、流された人や企業にとっては大きな痛手となっている。ある事件の容疑者と同じ名字だった為にデマを流され、嫌がらせの集中砲火を浴びたり、自ら命を絶った人もかなりいるが、最初にデマを流した人物が殆ど捕えられないのも不思議な話だ。

パソコンやスマートフォンをうまく利用すれば、生活必需品として大活躍をするが、犯罪に利用されれば、多くの被害者を生む悪魔の道具に変化する。

新型コロナ等の伝染病は勿論の事、人が作り出すウイルスにも充分注意する必要が在ると思う。

写真「花」江見精治

# 現金見てないわ事件

鳥形初美

先日、東京で友達と住まいをシェアして暮らしている娘が帰省するというので、岡山駅まで迎えに行った。帰りにどうしても買うものがあるから薬局に寄ってほしいというので、ある大手ドラッグストアに寄った。目的の商品を持ってレジに行った娘が、スマホを見ながら店員に何やら聞いている。

「〇〇か〇〇は使えますか？」「すいません、使えません。」

「じゃあクレカならいいですよね？」

「すいません、現金だけなんです。」

「え～～～！！そうなんですか…」

ってことで、私を呼び、車から財布を持って来なくちゃ…と言ったすぐあとに、

「あ～私現金持ってないわ。お母さん持ってたら払ってくれん？」

何も購入予定のなかった私も財布持って出てなかったので車まで取りに行き、とりあえず、支払いをした。

その後の娘のセリフが、

「久しぶりに現金見たわ～」

だった。

東京で暮らしている彼女たちは普段の生活で現金を見ることはないのだろう。私の暮らす田舎でもキャッシュレス決済で買い物する場面は見るし、私もけっこうな頻度で利用しているが、まだまだ現金払いの人が多い。『いつもニコニコ現金払い』という言葉もあったが、現金払いが『ニコニコ』とは言えない世の中になっている感じだ。

何かにつけて都会の生活の様子を見聞きすると、田舎はまだまだだなぁ…とか、遅れてるなぁ…などと感じることも多い。だが都会より進んでいることがある。高齢化だ。高齢化率を調べてみると、昨年の美作市で四〇％を超えている。中山間地域の高齢化率は日本の未来…そんなこともいつか聞いたことがあった。田舎の高齢化対策が未来の日本の対策の参考になる…？みたいなことも聞いたことがある。

しかし、今回の娘の『現金見てないわ事件』でいろいろ考えた。

コロナ禍でリモートだオンラインだとテレワークが増えている。もちろんこれも都会ほど進化している。田舎ではまだインターネットですら利用できない場所もあるようだし、

車にしたって、自動運転が発達しても、田舎の整備が進んでいない道路では使えないだろう。そんな暮らしの中での高齢者対策が都会の高齢者対策の参考になる?とても疑問だ。そして私がもっと高齢になった時にも有効だとはとても思えない。娘の世代が高齢者になった時にはなおさらだ。

人々の暮らし方は十年ひと昔どころか、一年でガラリと変わる今、暮らしに関わる制度も世の中に合わなくなっていることが課題になっていたりする。

このまま平穏に三十年くらい過ごせたらいいなぁと思っている楽観的な私だけど、今後の十年で世の中はまったく変わってしまうのだろう。想像すると不安もつのる。

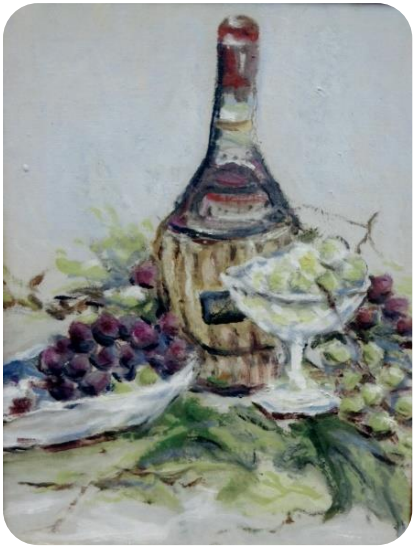
とはいえ、高齢化は否応なく進んでるし、田舎で使えるテクノロジーがあろうがなかろうが、高齢者の暮らしについては地域みんなで考えて対策を練ったり、助け合ったりしていかないといけないことは確かなことだ。

明日のことはわからない…そんな中でも、一年先、二年先、十年先の世の中を想像して、できることをしていきたい。もし想像する未来が不安だらけの世の中だとしたら、そうならないようにするために、今の自分にできることを考えてみたい。

写真「アジサイ」井口満春

# 随筆随想

折にふれて
感じたことや
見聞・体験を
なにくれとなく
書き綴る
思いのままに



洋画「ぶどうとワイン」末宗一之

# 生き様

日笠一成

私事ですが、思えば六十余年主に仕事で走り続けてきましたので、暫く「晴耕雨読」で時勢に身をゆだねる、そのことが至福のときとと思っていました。そんな時に思い出したのが、平櫛田中先生の「六十・七十は鼻たれ小僧男ざかりは百から百から」と述べておられるお言葉です。少し充電期間を経て、今一度身の丈に合った社会事業に参加・生涯学習に頑張ろうと思っております。長寿社会と言われておりますが、健康寿命の延伸も必要と思います。

体幹のみならず心身を鍛えるためには専門家の指導を受けることはベターとは思いますが、今は我流の柔軟体操をすることと歩く事、そして農作業も健康志向に捉えるように心がけています。「人事を尽くして天命を待つ」の心境も大切と思っています。

人生は波乱万丈とも表現されますが、山あり・谷もある一生涯でも時がたてば懐かしい想い出になると思います。

人はそれぞれの生き様があると思いますので、悔いのない人生を目指してやり切ったと思えるように歩み続けたいと思っています。

書「憧」長家豊丘

# 芳英小学校の校歌

片山武範

小学校の校歌を歌ってくれと言われて「芳英小学校の校歌」を歌ってみました。私は昭和九年七月二十四日の生まれですから、小学校は江見の国民学校でした。

作東の小学校の歴史は古く、明治五年(一八七二)の学制発布によって、明治七年に芳英小学(川崎村)、境播小学(土居村。のち真野小学)、三遷小学(小の谷村)、有終小学(小野村)が開校し、その後、明治八年に水南小学(白水村)と里仁小学(万善村)、明治九年に成絢小学(鯰村)、明治十年に田原小学(田原村)、明治十一年に竹田小学(竹田村)が開校しています。明治十九年(一八八六)には尋常小学は四年制の義務教育になりました。

ちなみに、江見の小学校名は、芳英小学から明治十二年公立芳英小学校に、明治二十年に尋常芳英小学校に、明治二十六年に芳英尋常小学校に、明治三十五年に江見尋常小学校に改称しています。

さて、私の通った江見の国民学校では、担任は岡山師範学校を卒業したばかりの岡本智恵先生(竹田)でして随分と可愛がってもらいました。同級生は、江見の小林すみこさん、田原の山下照夫氏・上田修氏・山下(現・杉山)まさこさんなどを思い出します。また、箱弁当を持参し、勉強は国語、算数、理科、音楽などで、運動会では騎馬戦、クラス別競争などでした。遠足は杉坂峠に行き田原のきれいな桜並木を覚えています。

江見尋常小学校は、昭和十六年四月に国民学校になり私はその一期生になります。この年十二月には太平洋戦争が始まっています。国民学校に六年間通いましたが、校歌はありませんでした。国民学校は戦後、新制の江見小学校になりました。

国民学校で覚えたのが「尋常芳英小学校校歌」です。今でも口ずさんでいます。歌詞は、溝曽路てるこさんが覚えていて書いてくれたものです。歌詞も曲もすばらしい校歌ですが、作詞者も作曲者も不明なのが残念です。

尋常芳英小学校校歌

一　山紫に那岐はれて
　遠く真北の空に立つ
　水明らかに吉野川

村をめぐりて行くところ
おおうるわしの我が郷土

二

遭幸待ちえし杉坂の
歴史にも著るく芳しき
芳英校の名に負える
たかき精神を承けて来し
おおなつかしの我が校舎

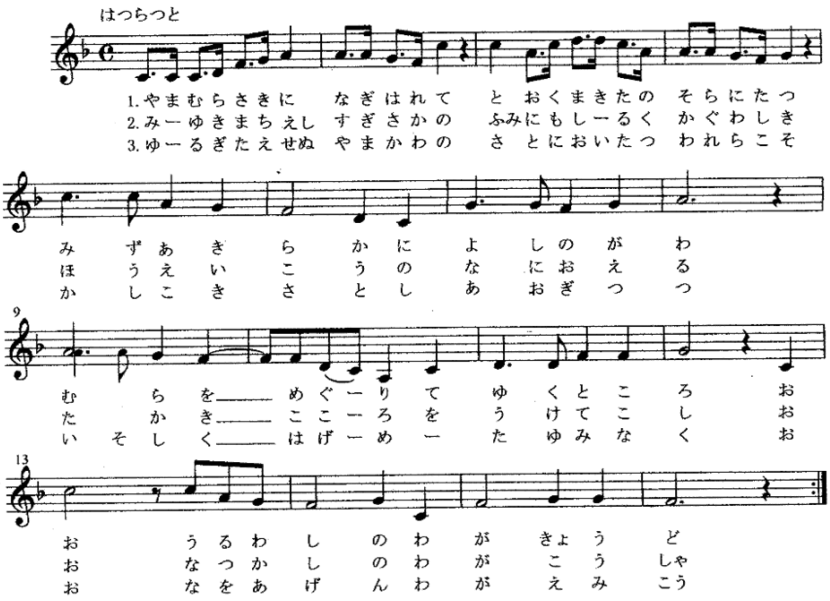
三

ゆるぎたえせぬ山川の
郷土に生い立つ我等こそ
畏き啓示仰ぎつつ
いそしくはげめたゆみなく
おお名を揚げん我が江見校

この校歌の音符を次に載せておきます。山下亨氏の紹介で作曲家の矢内直行先生(作陽音楽短期大学名誉教授)が私の歌った校歌を採録してくれたものです。校歌は郷土文化です。皆さんも歌ってみてください。

## 尋常芳英小学校校歌

作詞・作曲　不明
伝承　片山　武範
採譜　矢内　直行



# Think Right
## 誤った先入観を捨て、より良い選択をするために…

安東公一

「人は死ぬ時、意外にもあっさりと、あっけなく…」逝くものだ。私の妻も一夜の内に突然逝ってしまった。残された者の悲しみは大変だ。

小生が六十歳の時、東京のサンケイホールで三百人のお客の舞台の上で挨拶していて突然倒れ意識不明になった。

美しい小川には、いろんな花が咲き乱れ、シラサギが羽を広げて橋になり、私を待ち受けてくれていた。その時の気持ち良かったこと…。私は必ず渡りたいと思っていた。その時、妻と母が現れ、母は「我が家の為にも、まだまだ生きていてくれなくては」と言い、妻は「夫として、父として又、会社の二百八十人の社員の人達の為にも生きてください」というた。でも、こんなにすがすがしい気持ち良さは感じたことはなかった。逝きたいと思った。その時、意識不明から眼が覚めた。…そこは白いシーツのかかった聖路加病院のベットの上で妻が小生の手をにぎっていた。聖路加病院の若い先生が「安東さん出血が一ミリ動いていたら植物人間でしたよ」といってくれた。そして「危ないので手術はしないで点滴療法にします」と…本当に奇跡的だった。一か月入院して、岡山で二か月リハビリをして、職場に戻った。後遺症もなく…勤務を続けることができた。それから、何日かして、我社の業者会の社長がなくなった。その葬儀の日、社長連中から「安東さんは、一度死んだから九十九歳越えまで生きられる」と言われた。九十九歳って、どんな歳になるんだろうか?…

八十歳で心筋梗塞でカティテルをしたり、八十三歳の時、ふくらはぎが痛みだし歩けなくなり全身麻酔七時間の背骨の手術をした。この歳でもつことができるか?と思ったがクリアできた。担当の先生が「安東さん、昔だったらしなかった手術だけど、人生百歳時代だから手術をしたが、もうできないよ。用心してね。」と言ってくれた。

小生、後十五年で九十九歳に成るわけだが、その間に自分が如何にな

っていくか?…未知の世界ですからネ…でも、東京での経験で白サギの橋を渡れるから死は怖くないが…人に評価されることより、大事なことを知っている人達や、自分の格好良さも、カッコ悪さも知っている人達が仲間なので、どこか悠々として生きている気がする。死はこわくないけど、この世でしたいことが一杯あるから長生きしたい。

人間には水のように、絶対、必要とされているものがあると、思うんです。『生きているっていいね』と言う希望です。そこに辿り着く為に私は生きようと思うんです。「人は死ぬまで、ちゃんと生きるんだよ。」と、だから、定年のない青春を幸せに感じてOne more timeありのまま、生きたい。

八十五歳の独り言　　おわり。

書　田中真弓

## ありがとう

山　さくら

ある市内の病院の待合室。酸素ボンベを付けたおじいさんと知り合いのおじいさんの会話。

「わしもこんな体になってしまって何もできなくなってしまった…、情けないわ。」

「歳は取りたくないな…。」

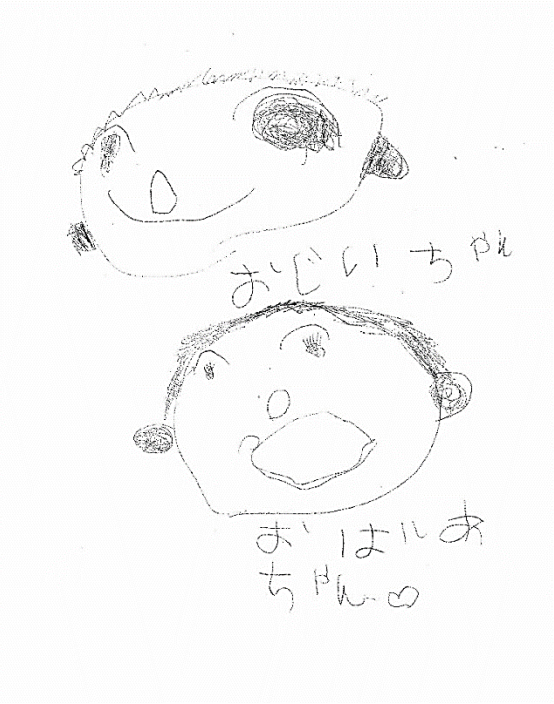
数十分たって、おじいさんは診察が終わった。

「じゃまたな。早く帰って畑をせんといけんけん。こんな体でも孫や子供達が、おじいちゃんの作った野菜を美味しいと言って食べてくれるから…」

とボツボツと帰って行かれました。

その後ろ姿を見ながら思いました。

丹精こめて丁寧に育てた取り立ての野菜を食べれることほど、最高の贅沢なことはないですものね。退屈な待ち時間を穏やかな時にして頂きました。




さあ、私も子供や孫のために美味しい夕ご飯を頑張ろうと、病院を後にしました。（七十代・主婦）

写真「バラ」井口満春

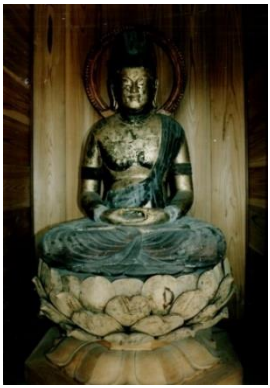
# 大日つぁま

井口祥子

私の祖母は、大日如来をあがめ「大日つぁま」と称して心から信仰していました。

今の私は、祖母の年令に達し、祖母と同じように、大日つぁまを信仰しています。

その大日如来は、我が家の近くにある大日堂に坐し、長い年月人々の祈りの対象となって来ました。



大日如来坐像

この仏像は、誰の作か分かりませんが、木像の一木造りで平安時代後期のものといわれていることから、千年も前に作られたものと思われます。

大日如来を辞書の広辞苑で調べると密教の本尊、その光明があまねく照らすところから遍照または、大日という。智を象徴する金剛界と理を象徴する胎蔵界との区別によって二種の尊像があると書いてありました。大日堂の大日如来は金剛界なのか、胎蔵界なのか、作東町の歴史を紐解くと胎蔵界と書いてありました。

大日堂には、この大日如来坐像の他に十一面観音像、弘法大師像、毘沙門天像があります。もともとこれらの像は、今の位置より奥の寺谷に栄えていた真言宗菩提山善福寺に古くから安置され庶民の信仰を集めていたと伝えられています。慶長年間、森忠正公入国の後、善福寺を祈祷所とされたが、遠くて不便なためこの寺を津山に移されました。(現在の安国寺) しかし、これらの像だけ寺谷の入口の大日堂に残されたそうです。

以来、先祖や地域の人達の手で大切に守られてきました。ところが、お堂の中の土間から竹が伸び天井を突きやぶるばかりとなり、大日如来坐像そのものも蓮弁が欠け、指も欠け落ち屋根もトタン葺で大風に遭うと飛ばされそうな状態となりました。そこで近くの四、五軒で再建を思い立ちお堂を改築、又、大日如来像が県の重要文化財になっていることから県の文化財課にも応援いただき、

仏師の長谷川氏の手で修復が見事になされたのが平成十四年のことでした。角南の地域の方々にも浄財をいただき、みんなでお守りすることができることは、私にとって最大の喜びであり、これからも「大日つぁま」を信仰し、心の拠り所としたいと思っています。

# 俳句事始め

山本宗雨

昔から「六十の手習い」と言いますが、八十歳の手習いで作句を始めました。「さゝ舟会」に入会を許され、会報四月号から作品が掲載されています。全くの初心者であり、句会で指導願いたいと思っていたところが、コロナウイルスが心配で句会は休止とのこと、我流で作るしかなく恥ずかしい限りです。しかし、俳句には若い頃から関心はあり、歳時記などは手元にありました。俳句といえばやはり芭蕉です。芭蕉を手本にすることとしました。津山では、津山出身の西東三鬼が有名で新興俳句が主流でしょうが、私はどうも理解が出来ずにいます。現代の作家では飯田龍太の句が好きです。わからない句もありますが何となく雰囲気が好きです。この人の句を目指します。

私は語彙も少なく難しい俳句は元より作れませんが、だれが読んでも理解できて、そうかそうかと納得のゆく作句をと心がけます。コロナのため外出も控えています。吟行もできません。どうしても身の回りの物を題材とした句になってしまいます。

飯田龍太が書いているが、「目を洗って季語・季題を眺めなさい」と。また、「目を見開き、耳を傾けるなら自然は時と所を選ばず、常に人為などはるかに及ばぬ大きさを持った存在であろう」とも言っています。

次に私の最近の句を披露します。

鉢植えの薔薇の植替日に五鉢
花にうづもれ逝く普段着の兄よ
今年また牡丹の莟数へをり
手のひらに薊の虫を落としけり
浴衣でと案内のある朝の茶事

# 今だに百姓一年生

影本昭子

退職後、夫の田舎へ帰り生活するようになり、九年目に入りました。生活の中で一番の変化は畑仕事をするようになったことです。今まで畑のないところで生活してましたから初めは夫のお母さんに教えてもらい、それから近所の方に教えてもらい、見よう見まねでやってきましたが、今だに百姓一年生です。

まずは、ミニ耕耘機を購入しました。運転免許のない私でも使うことができます。初めて耕した時、土が黒くふんわりと盛り上がり感動しました。鍬はうまく使えません。備中鍬の効果的使い方を夫から聞いても、重くてバランスをとって耕すことは難しいです。私はもっぱら先が三角に尖った長い柄のついたアルミ製の三角ホーを使っています。畝を作ったり草抜きをしたり、三角ホーの先で草をトントンたたいて中にヘビがいないか確かめたり、重宝しています。

畑で作業をしているといろいろな方が声をかけてくれ教えてもらうことがたくさんあります。嬉しい限りです。

こんなことがありました。ジャガ芋の植えつけをして芽が出てくると、毎日畑へ行って今日は何個出たかと数えて回りました。何だかお隣の畑よりうちの畑の方が葉もよく繁りよく成長していると秘かに喜んでいた時、「芽欠き」のことを教えてもらいました。あーそれでお隣さんのジャガ芋はすっきり伸びているんやと納得。遅ればせながら芽欠きという大切な作業をすることができました。

種を播き芽が出る、苗を移植して根付く、嬉しいひとときです。でも、虫に喰われ枯れたり、葉っぱがレースのようになっていくのも経験しま

した。イノシシやハクビシンにさつま芋や大根を食べられ、がっかりしたこともありました。作物の収穫までにたくさんの世話がいるようです。植えっぱなしになりがちな私ですが、ベテランの方の畑を見習いながら一歩ずつ進んでいけたらと思います。

二年生の孫が日記に「田舎のおばあちゃんがやさいをおくってきました。その中に青い虫がいて、ママは大さわぎでした。ぼくは虫をよくく見てどんなちょうちょになるのかなと思いました。」と書いていました。担任の先生の赤ペンのコメントが「虫がいるということはあんぜんなしょうこだね。」でした。　先生ありがとう。体にやさしい野菜をめざして百姓一年生がんばります。

絵手紙　小坂田千恵美

# 私と書

長家豊丘（豊幸）

小学二年生の春先。母の勧めで我が家から道程三キロの地元川崎の書家・阿部雲魚氏の門を叩いた。

その当時、稽古事として、日本舞踊、算盤、絵画など多種おこなっていたが、書だけは、中高生のときも欠かさず週末の練習(稽古)に伺い、王羲之、顔真卿や六朝時代の石碑など魅力的な作品の臨書の手解きを受けた。そして、高校を卒業するにあたり、「今以上の研鑽のためには中央に出向き、新しい書の研究をするように」と師である阿部氏の助言により、当時中央書壇で話題となり活躍していた前衛書壇の祖・奎星会会長上田桑鳩、同副会長宇野雪村を紹介され、人間的なスケールの大きさが魅力の上田氏の門を叩くことを決め上京したが、拝眉する間もなく急死され、やむなく、進学先である大東文化大学で教鞭を執っていた宇野雪村への弟子入りとなった。

「お上りさん」の私には見聞のすべてが新鮮で刺激的であり、何か目に見えないものに向かって邁進しているような東京人のバイタリティーに圧倒されたのを覚えている。

門下での最初の作品互評会に、田舎で学んだ力量で書き上げた練習作品を師匠をはじめ先輩方に披露したとき、指摘される痛烈な批評、先輩たちの作品の力強さ、美的センスなどには、井の中の蛙であった私は打ちのめされ、何ともいえぬ屈辱感を味わった。しかし、この挫折感がその後の私の書への取り組み方を一変させた。手習いから書家を目指す一門下生への変心だった。

毎日二百枚の臨書を日課とし、貪欲に資料本を読み、作品鑑賞も謙虚な気持ちで行い、美の本質を追求していった。やがて中央展にも出品する機会を得、先輩方からも仲間として受け入れられるようになり、中央（東京）で書家を目指すという一つの夢の実現に向けて邁進した。しかし、卒業が近づくにつれ、田舎の吸引力は想定外、やむなく県内で書道教師としての教員生活に立ち至った。

年齢とともに東京へ出向くことも多くなり、岡山市に拠点を置き、書の道を貫き通してきた。教員生活も平成二十五年度、四十二年間の時を経て退職。

総決算のつもりで古希を期に所属団体である毎日書道会会員、奎星会同人、墨象会役員の一連の資格組織から脱会。金と人脈の世界から解放された今、個展でもして、愚作を披露してみようか、…など無計画、不確実な私案を巡らしながら、新たな気持ちで今は、ただの趣味人として、筆と戯れている。

書　長家豊丘

## 災害の記憶を将来に

作東公民館長　有友一正

五十年近く作東地域の文化活動の拠点となってきた作東公民館が建て替えられることになり、令和三年十一月から一年余り休館となります。建て替え前特別企画として、地域を襲った災害の記憶写真展を実施しました。

まず、昭和十八年七月の豪雨は、小房のため池が決壊して、小野、粟井中、馬形で十人の死者・行方不明者が発生するという大災害になりました。この時江見の旧大還橋を襲う洪水の写真（写真①）は、当時の江見町長だった道信雅志さんが保存され、孫の章策さんに提供いただきました。木橋の欄干付近まで濁流が迫り、川北側に人々が立往生しています。

昭和三十八年七月十一日の集中豪雨では吉野川が氾濫し、作東町内の七つの橋が流失しました。この四日後に空撮された写真を、今回岡山県記録資料館の提供を受けて展示しました。写真②は川北上空から江見

を撮影したもので、中央に昭和三十二年に竣工した大還橋が吉野川を跨ぎ、右側の通りの延長線上にあった旧大還橋は流されています。写真③の岩辺では、洪水の危険性のあるところを避けて民家が建てられているのがわかります。

平成二十一年八月に兵庫岡山県境地帯を襲った集中豪雨は両県で死者・行方不明者が二十一人となる大災害となり、山家川などが氾濫しました。江見の方からは、「昭和三十八年の時とは水の来る方向が異なっていた」「半年前に婦人防火クラブで災害時の危険個所、安全な場所を確認しており、自動車の事前避難等に役立った」といった声をお聞きしました。公民館前にある大きな石碑には、江戸末期に江見を襲った大火とその対策が記されていますが、こうした記憶、記録を教訓に将来に生かしていかなければなりません。

昭和四十五年の大阪万博の三菱未来館では、五十年後の未来が語られ、科学技術の進歩で台風等の災害をコントロールできるようになると

① 昭和18年7月
濁流の中の旧大還橋

② 昭和38年7月　洪水後の江見

③ 昭和38年7月　洪水後の岩辺

言っていたように記憶しています。実際この五十年間の技術革新はめざましく、天気予報の精度は高まりました。一方で無秩序な技術が地球温暖化、異常気象の常態化につながっている側面もあります。ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理念を取り入れた、川上からの環境改善につながる公民館活動を行いたいと思っています。

（参考文献「作東町の歴史」）

作東公民館前の大火記念碑

# 異文化との出会いから

島根 政一

私は若い頃、縁あって多民族国家のブラジルに永住権を取得し、十三年間滞在する機会に恵まれました。

ブラジルは、国土が日本の二十三倍もあります。私の住んでいたパラナ州は日本の面積の約半分の広さでアルゼンチンとパラグアイに隣接していて、人口の七十五パーセントが白人で占めています。十九世紀後半にヨーロッパからの移民が活発化し、ポルトガル、ポーランド、イタリア、ドイツ、ウクライナからの移民が入植し、その後二十世紀以降は、日本、レバノン、シリアからの移民がこれに加わり、現在では東欧からの移民およびその子孫が最も多く、ドイツ系、イタリア系がそれに続いていて、日系人は約十五万人が居住しています。

私の住んでいたロンドリーナ（小さいロンドン）は、パラナ州の北部に位置していて、人口五十一万ほどの落ち着いた中都市です。経済の中心は農業で、コーヒーの国ブラジルにおいても「コーヒーの都」と呼ばれているほどコーヒー栽培の盛んなところでもあります。現在は工業都市への脱皮を進めており、また、教育の振興にも力を入れています。

こうしてロンドリーナは今では暮らしも落ちついた町ですが、第二次世界大戦中は、ブラジルが連合国側に立って参戦したため、日本人をはじめドイツ人やイタリア人は「敵

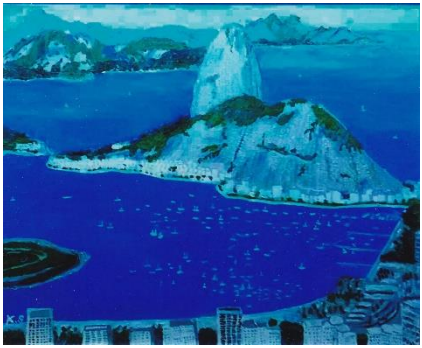
性外国人」となってしまい官憲による厳しい監視の対象となりました。まして異文化社会の中でしたから、大変困難な暮らしが続きましたが、それを乗り越えて今日の地位を築かれたことに敬意を表したいと思います。

一方、こんなことがありました。私が未だブラジルに渡って日も浅い頃、リオデジャネイロのバスターミナルで乗継ぎのバスを待っていたら、恰幅の良い老人が私の横に座って、「日本とドイツは第二次大戦の時は互いに連合国と戦った仲だったなあ」と親しく話しかけてこられました。これには驚きました。

そのことがあってからドイツ移民の方に親しみを感じるようになり、また、他の国からの移民の文化についても熱心に学ぶようになったのです。すると、それぞれの国の方がさまざまな文化の壁を乗り越えてお互いに理解し合いながら暮らしていることに深い感銘を覚える日々が続きました。異文化を学ぶきっかけを与えて下さったドイツ移民の老人には今でも感謝しております。

異文化のカルチャーショックについてはもちろん私自身も経験しました。また、戦前の日本の生活感情や慣習をある程度温存している日系人社会の間にもカルチャーショックがあったことも事実です。今思えばそうした多くの異文化との出会いの体験をしたからこそ、現在でもブラジルの友達との交流が続いているといえます。

ところで現在、美作市にも多くのベトナム人研修生が来ていますが、彼らも日本（美作）の文化に少しでも慣れようと一生懸命に頑張っています。ベトナムにも日本にないすばらしい文化がたくさんあります。日本とベトナム、お互いの文化を学び理解し合うことが大切だと思います。この町で暮らす多くの研修生が日本の文化になじみ、交流していただくことで美作市が多様性のある元気な都市となるように心から念じております。



「思い出のリオデジャネイロ」
洋画　島根和江

# 田舎暮らし

浅田年史

『田舎暮らしと哲学』（木原武一）を読み私の田舎暮らしについて考えてみました。

木原氏は何気ない毎日の中で新しい発見をし、思索しています。「田舎は哲学の宝庫であり、ひと茎の草も森羅万象に関わる思索へと誘う力を秘めている」と述べています。

木原夫婦が散歩していて草花の名前がわからないと草花と挨拶ができないので、図鑑を参考にして木原氏二九〇本、妻四一九本、草花の名前を調べたのには驚かされました。私は春の七草、秋の七草を覚えるのにも苦労しています。地域の中にも薬草に詳しい人がいて、その人によれば、雑草と言われる草の大部分は食用になるということです。

木原氏は家の中からバードウォッチングをしています。私の自宅の周囲でも時々キジをみかけます。春になるとうぐいすの鳴き声が方々から聞こえてきます。よく聞いてみると「ホーホケキョ」だけではなく、まだ初心者と思われる「ホーケキョ」の鳴き声も聞こえてきます。

「子供は大人の父」と言われるように大人が気づかない面に気づくことがあります。

数年前ある男の子が

「みてみてトカゲかわいいじゃろ」

と目の前にトカゲを差し出しました。今までトカゲの顔などじっくり見たことがなかったのですが、しげしげと見ると実に可愛い顔をしているのに初めて気が付きました。私にとって新しい発見です。

無農薬で育てた野菜のおいしいことに気がついたのも発見の一つです。トマト、なすなど朝採りをして食べると実においしいのです。スーパーで買ってきた野菜とは比べものになりません。

田舎で生活していて遭遇したくないものがいます。イノシシです。威嚇されたとき背中を見せて逃げたら襲われると思い、両手を高く上げ、大きく見えるように構えて「ウオー」と大声を出しました。数分間の硬直状態の後、イノシシは山の方に逃げていきました。その後を子供のイノシシ四匹がついて行きました。後で震えが止まりませんでした。

私は自然をゆっくり味わったり自分自身を省みるゆとりのない生活を送りがちです。

でも、木原氏のように身近なものに目を向け、発見や工夫をして生活が出来たら田舎暮らしが楽しいものになるでしょう。

写真「宮原獅子舞」江見精治

# ろくろを挽いて十六年

永野宜治

ろくろ（轆轤）を挽いて木工品づくり楽しむようになって十六年になる。かつて倉敷に住んでいた頃、師匠・石井可七氏（故人）に教わりながら始めた木工芸だが、四年前に田渕の高原に移住して「山の工房」を作り、ろくろ一基を設置して一人で趣味の木工芸に励むようになった。海辺に住むか山に住むかといろいろ考えたが、木の文化、山の生活を選んで縁あって移住したわけである。

私の作品は、主にお盆、合わせ物、茶筒、お香入れなどを得意としているが、角盆、茶杓、茶托、スプーン、フォークなども作ってきた。いずれも木の持っている格別な味わいを生かすために漆塗りはしていない。

いわゆる「挽き物」作りであるが、この「ろくろを挽く」という作業には、いい素材の木が必要である。私は、素材の木は高梁の「吉備工房」から調達している。エンジュ（槐）、桑、ベニサクラ、カヤ（榧）などを使う。素材の木を選ぶのも楽しみであるが、山に入ってエンジュを探し、見つかると山の持ち主を探すのに大変苦労することもある。

さて、板目切り、柾目切り、縦木切りなど素材の木の切り方にも種類がある。お盆、盛り器、茶筒、蓋付き椀といったように用途に応じた寸法に大まかに切る。これは鋸仕事である。作品を作る前に形のイメージをつくり一気に仕上げるのである。

気を遣うのは、「合わせ物」は季節によって膨らみが出ることがあることだ。木は生きているから熱と鉋で変形することもあるから、短時間で仕上げることを心掛けている。

ろくろの段取りにもいろんな工夫がある。木地を削る面とは反対側に「はめ木」をはめて回転台に取り付けてろくろに固定する。「はめ木」でろくろに固定させた木地に鉋を当てていく。ろくろの仕事は、荒挽き、中挽き、仕上げ挽きの三つの大きな流れがある。

私が挽き物の作品づくりで格別に心がけていることは、「磨き」である。ろくろ仕上げの後、真剣に丁寧に磨く。これで木の本来の艶が出て美しさが増していく。漆を使わなくても磨けば光る。十分満足のいく作品づくりには磨きが命なのである。

私は時折、木地師で人間国宝の川北良造氏のお言葉を思い出す。「木にも顔があるといいましょうか。どの木として同じ顔のものはないのです。もちろん顔が違うように性質も違いますから、私は新しい木と出会うたびに、どうやってつきあっていこうかと心を砕きます。木の持つ顔や性質をうまく引き出し、器の中にそれらが甦ったときの喜びはなんともいえないものです。」

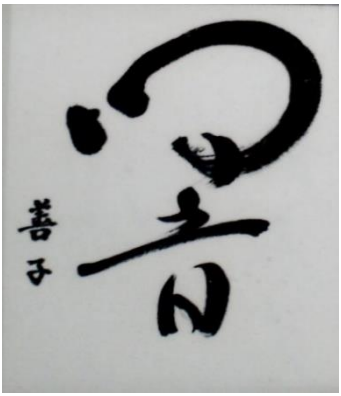
自作の作品は、朽木の丸大製材所の工房（永庵）に少し展示したことがある。個展をやったらと言われるが、私は作品を知人にお譲りしていて自宅に置かないことにしている。でも、機会があれば個展もやってみたい。弟子というほどではないが、倉敷からろくろを挽きに来られる女性の方に作品づくりの指導もしている。

木工作品(筆者)

私は、もともと機械屋だったから材料さえあれば何でも自前で製作・修理する。溶接もやる。木工道具の「鉋」は何十種類も自分で作ったし、包丁・刃物類も作る。最近では自宅にピザ窯（二段式）を製作した。「五年かかることは一年でマスターする」

「一人で十人前の仕事をする」のが性分であるが、「一つのことに専念しない」ことも信念の一つである。

また、私は、ハンターを約四十年やってきた。高原に住むようになって猟友会に入り、近所の方々から覚えた罠で鹿・猪を獲ることも覚えた。が、雌と幼獣は殺さないことにしている。猟友会の大先輩から教わり狩猟した鹿や猪の完璧な血抜き方法をマスターした。うまい肉を分配するのも山村暮らしの楽しみでもある。



書「響」春名善子

# 出雲街道

延原順子

初めて岡山県を離れたのは林野高校を卒業した十八歳の時です。ホントにもう思い出せないほど昔のことになりました。以来、県外の生活が五十年以上続いているのですが、少しずつ街での生活に慣れていって、故郷のあの微妙な四季の変化が遠のいていきました。しかし、いまだに岡山県民であると言う気持ちも健在で、都合に合わせて兵庫県民を主張していて、何とも調子の良い話です。故郷が二つと言うのも楽しいことです。

現在、私が住んでいる兵庫県は山一つ挟んで岡山県とお隣同志ですから、道で繋がっている歴史の中では、僅かな文化の違いもあれば共有できる部分も多い。確かめてみたくなり、姫路を出発して出雲街道を辿り四十曲峠から根雨の辺りまで行ってみました。

その間に出会った人たちの親切と優しさが印象深く、また、長閑な田園風景、低く連なる山々、旅人を受け入れる純朴な人々がいて、この出雲街道には五街道とは一味違う穏やかさと明るさを感じます。出雲の国と播磨の国を繋ぐ街道の大部分を占めるのが美作の国。ここで先祖たちは何を考えどんな生活をしていたのか、想像してみるとワクワクするものがあります。

ところで、中国道の作東インターから東へ三十分、加西インターの南

三キロに兵庫県立フラワーセンターがありますが、この広い敷地の中に県立考古博物館加西分館があります。こちらでの展示品のメーンは「古代鏡」です。加西市内の㈱千石の社長・千石唯司氏からの寄贈で古代鏡展示館に展示されていましたが、この度更に追加の寄贈があり新展示室が完成しました。この千石コレクションは、紀元前三千七百年から唐の時代頃までの古代鏡を中心に、古代の楽器、唐三彩などです。特に、古代鏡は正倉院と同等のもので、故宮博物院に存在しないものもあって、専門家からも高い評価を受けています。皆さまにお勧めしたい所です。

青銅器から時代が下って鉄の時代になり、出雲から中国山地に拡がるタタラ産業はどのように生まれ育っていったのか、ふるさとの出雲街道と「鉄の文化」を考えると興味が湧いてきます。時代時代で大きな役割をになった出雲街道のドラマを聴いてみたいものです。

（兵庫県稲美町在住）

生け花　大倉淑甫

# 歴史紀行

大きなできごと
些細な歩み
みな
人間の歴史

かたりべとなって
伝えよう

写真「宮原にて」江見精治

# 豆満江（とまんこう）

圓東光夫

ダダダダー列の後方で自動小銃の音がする。ここは戦場だ。銃声には慣れている。たれか用足しで列を離れたのだろう。この列が北朝鮮駐屯日本軍の最後のシベリヤ送りか。

何百人かの元日本兵の列。豆満江の河原をソ連兵にせき立てられて歩く。前後両側には自動小銃のソ連兵がいる。

列の中ほどで「萩の花が咲いている」との声がする。自分等は前の方だ。見に行きたいが隊列を離れれば逃亡とみなし球が飛んでくる。我々には武器はない。もう一年前に終戦で武装を解かれている。針を抜かれた蜂のようなものだ。どこに連れて行かれるのだろうかと戦友と話す。

ここは鮮満ソの国境付近と思われる。朝鮮中程の三十八度線までは何百キロあるかわからない。ここは敵支配の地だ。

寝るのはまだ暖かいから何とかなるだろうが食料がない。どうするか。ソ連兵には日本人か朝鮮人かの区別はよくわからないらしいが、北朝鮮には保安隊とか言って、民間の防護団があって銃も持っているらしい。彼等朝鮮人から見れば元日本兵はすぐわかる。捕らわれてソ連軍に引き渡されれば銃殺と聞く。ソ連兵から見ればここは最前線の戦場なのだ。

脱走はあきらめようと話し合う。もうなりゆきに任す外はなかろう。生死は運次第だ。

満州派兵時の圓東さん

一九四六年九月の初めとはわかるが、今日が何日かわからない。

「運命に流るときめた萩の雨」

これが句になっているかどうかわからないが自分には辞世の句だ。

河原道でよもぎに似た草を一本手折る。いつどこで死ぬかはわからない身、生きて日本に帰れる保証はない。草よお前は豆満江から日本海に出るだろう。そして鳥取沖を通ったら南に向いて「岡山県江見町産まれ

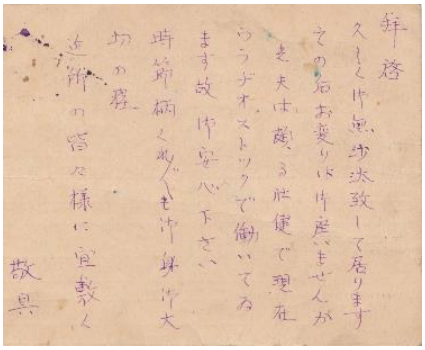
の兵士がシベリヤに連れて行かれた」と叫んでくれと川に流した。

豆満江を渡りソ連領に入ってからは、昼は野に寝て、夜になったら月明りで歩く。満月だった。三晩くらいでシベリヤ鉄道のクラスキー駅に着いた。

それからは「寒」と「作業」との闘いであった。同じ隊の秋田出身の友と話す。死ぬのは北海道でも九州でもよい。日本の土を踏んでからにしてくれ。このシベリヤでは死にたくないなあ。

運あって一九四八年秋引揚船遠州丸で日本に帰れた。あれから七十余年たってこの度百才の誕生日を迎えた。

今思えば「溺れる者は藁をも掴む」と言うが、豆満江に流したあの草切れはまさにそれであったなあ。



シベリア抑留地からの手紙

# 粟井中村銀山の今昔

春日神社　宮司　粟井睦夫

皆さんはご存知だろうか。かつて、粟井の地に石見銀山と並び称されるほどの銀山があったことを。春日神社に横二メートル、縦五三センチの扁額がある。「太鼓奉献」明治参拾参年　子四月　とあり、奉納者三六名の名前と世話人横林嘉右衛門、岡田新助とある。寄付者筆頭は最高額寄付者の豊福俊雄以下氏子二七名の他に、銀山鉱夫九名の名前がある。なぜこのような物が有るのか気に留めた事も無かった。しかし、平成二五

年、当神社の鎮座一千年記念誌発刊の際、たくさんの奉納絵馬・額・棟札等を解読していくうちに、多くの事が判明、推定できた。この扁額で気になるのが粟井中村銀山の鉱夫九名と実質世話人の岡僧正である。なぜ氏子さんでも無い北福鉱山五名、瀬戸鉱山三名、大弘鉱山一名の鉱夫さんが寄付されたのか。またお坊さんが何故神社のお世話をされているのか。考えてみれば不思議である。これらのことから次の推定ができる。即ち豊福俊雄氏と粟井中村銀山の関係である。豊福家は旧粟広村馬形の素封家で知られている。豊福俊雄氏は医者であり養蚕指導者で実業家である（出雲街道土居宿を後世に残す会「東をつなぐ」から引用）粟井中村銀山は北福・瀬戸・大弘の総称である。宗掛と馬形の一部にまで及んでいた。いつの時代から採掘されていたのかは分からないが、江戸時代は天領の時代が長く続いた。古町代官四七年間、京丹後市の久美浜代官四八年間、兵庫県の生野代官四六年間、合わせて一四一年間である。生野銀山史料館に粟井中村銀山に関するものがある。同史料によると、天保九（一八三八）年四月一九日、第一一代将軍家斉から一二代家慶への御代替わりに伴うお国廻り巡見で、高橋磐之丞、八木国大蔵、山本庄右衛門ほか一八人による御料巡見様が来村した。四月一三日生野銀山に到着し二か所の吹き方を検分、その日は生野に泊まり一四日朝出発し一九日粟井中村に到着。銀山役所の説明を受け役人の案内により、中村銀山に入山して吹き方を検分した。その夜は市場に泊まり二〇日の早朝石見銀山に向かって出発して行った。（「春日神社誌」P九二）このことから江戸幕府は生野・粟井中村・石見を

粟井中村銀山明里絵図表（春日神社拝殿の額）

同格の銀山として扱っていたことが分かる。粟井中村銀山は当神社の真向いにある通称「ふく山」と呼ばれる小山から宗掛・馬形にかけて広がり、たくさんの横坑・竪坑などの間歩が見られ、吹屋、稼ぎ人屋の跡や鉱滓の山も確認できる。

さて話を本論に戻す。扁額の筆頭に記されているのが前述した最高額寄付者の馬形の豪農で素封家の豊福俊雄氏である。中村銀山は廃藩置県の後、昭和二十年代初期から戦後まで採掘されていた。にも関わらず経営を誰が引継いだのか不明である。地元の誰かが引継いでいたら資料か口伝の形で残る筈である。そこで考えられるのが豊福俊雄氏が経営を引継いでいたのではないかということである。

美作市和田と田殿地区を結ぶ梶並川に架かる一色橋がある。この橋の上流右岸側は通称北海道と呼ばれている。ここから高瀬舟に貨物を積み込んで吉野川、吉井川と西大寺まで下って瀬戸内海を経て上方に運ぶ。つまり海の道の北限という意味と言われている。しかし梶並川は水量が少なく安定供給には程遠く実際には林野（倉敷）まで荷駄で運んだ。豊福氏はこの銀（この頃は銅になっていた）の安定供給は舟ではなく陸蒸気の必要性を痛感していた。そこで、鉄道敷設の大業に着手するに当り、安全祈願祭の為に太鼓を奉納したのではないかと推測するのである。明治二九年に作東鉄道計画に豊福俊雄氏が参加したとあり（前掲「東をつなぐ」より）工事に着手したであろう頃と符号する。さらに鉱石輸送のみならず鉱夫達の坑道掘削の特殊技術も活用されたと考えられる。俊雄氏の後を継いだ長男泰造氏は万ノ峠トンネルの難工事により残念ながら資金に行詰まり破産した。家屋敷・家具・庭木に至るまですべての物品が競売に懸けられ家族は身一つで大阪に出られた。この為、これらを示す資料も散逸、紛失して皆無である。余談であるが当神社に豊福家の庭園に在ったと言われる小堀遠州式のお茶室用灯篭が奉納されている。粟井中氏子の名部八百吉氏の奉納によるもので、美作市の重要文化財に指定されている。豊福氏は当神社が郷社に叙せられたときも大きな努力を尽くして頂いた功労者のお一人である。この太鼓は大きくて軽くて、しかも良い音で太鼓の音が氏子区域の隅々まで響いたと言われた。残念ながら中国道が全通して暫く経った平成八

年に盗難被害の憂き目に遭ってしまった。警察に届けて捜査して貰ったが未だに何の手掛かりも無い。この頃、中国道沿線の神社は兵庫県から広島県にかけて多くの神社が被害に遭った。専門の泥棒が盗品ばかりまとめて外国に持ち出すのだそうだ。外国の成金が楽器の中で最も大きな音が出る太鼓が喜ばれるそうで、もう国内には無いだろうと言われた。犯人は今頃は大きな罰が当たっている筈である。

次に、岡僧正のことである。神仏習合の当神社にはかつて別当が在った。即ち現在春日歌舞伎座横に龍頭山淡相寺として存在していた。

春日神社には一千年を超す杉や桧・欅の御神木があり大きなパワースポットとなっている。神社裏山には美作市指定の重要文化財である粟井城址（淡相とも）があり馬落とし武者走り土塁跡などが破壊される事なく残っている。春日神社から二の丸、本丸、東の丸を経て西の丸の「ふく山」から広がる粟井中村銀山に至る周遊散策路（一時間と二時間コース）を設置する夢を抱いている。歴史研究家をはじめ諸賢のご指導を切に希う次第である。

## 明治政府の策略

井上 健一

昨年予定されていたオリンピックも一年延期になってしまった。前回のオリンピックも、昭和十五年に行われる予定だったそうだ。

昭和十五年と言えば、皇紀二千六百年になるそうだ。それを記念して名付けられたのが、ゼロ戦だとも聞いている。調べてみると、紀元前六百六十年に神武天皇が即位された年と書いてあった。これを見て大きな疑問を持った。

古代の日本を知る文書は、中国の魏の時代（西暦二百三十九年）に発行された《魏志倭人伝》と聞いてい

る。《魏志倭人伝》には邪馬台国の女王卑弥呼と、戦っていた狗奴国(くなこく)については記載されているようだが、天皇の称号を持った人物の記載があるとは聞いていない。

後の世の大和朝廷が支配した時代にも、大和朝廷が誰なのかは特定されていないはずだ。

日本最古の書物は、奈良時代中期に出版された『古事記』と『日本書紀』だと聞いているにもかかわらず、紀元前六百六十年と言うような、具体的な数字が出て来るはずがない。紀元前六百六十年を年表で調べてみると、縄文時代の末期に当たるではないか！縄文時代という時代は戦いの無い時代で数千年も続いた時代のはずだ。となれば天皇と言うような巨大な統率力は必要ないはずだと考えた時に、『もしかすると、強引に武家社会から帝国性に鞍替えさせた明治政府が絡んでいるのでは…？』と、考えてみた。するといくら考えても解けなかった謎が次々と解けたではないか！

最初に疑問に思った『皇紀』二千五百五十年は明治二十三年になり、その前年に『大日本帝国憲法』が発布されているのだ。

では謎解きに話を進めるとしよう。天皇を神聖化することで、武家社会を復活しようとする動きと、政府に反抗しようとする動きを封じ込めることが出来た。更に、憲法で規制することで、皇室の過去の汚点を残す出来事が、暴かれることを防いだ。皇室にまつわる美談を浮き上がらせて、皇室の権力を誇示すると共に、政府の足固めを強固なものにした。

現代社会の基礎は明治維新だが、その裏には政府に利用された皇室の姿があることを、知っておくべきではないだろうか！

# 峠の文化を訪ねて

橋谷田岩男

私は、智頭町で漆器づくりと漆の研究を楽しんでいる。智頭町は、那岐山系を境にして美作市と隣り合っていて、因美線による往来が頻繁だった。三十年ほど前になるが、岡山に行くときはこの因美線を利用した。物見トンネルを抜けると、「みまさかかわい」「みまさかかも」と頭に美作が付く駅名に変わる。因幡から美作に入ったのだとすぐわかる。急行「砂丘」が津山につくと、駅弁のおじさんが黒いつばのついた帽子を被って、「べんとー、べんと、べんとー」と甲高い通った声で駅弁を窓越しで売っていた。弁当とやかんの形をしたプラスチック容器に入ったお茶を買い、四人掛けの窮屈な椅子で食べたことを思い出す。

峠の道は、昔は生活の生命線であった。美作と智頭町の境には、いくつもの峠がある。加茂町に抜ける物見峠、奈義町に抜ける黒尾峠、美作市に抜ける右手峠、西粟倉村に抜ける志戸坂峠。どれもみな、重要な役割を持っていた。

私が最近訪ねたのが、右手（うて）峠である。梶並川の上流にある木地山につながる峠である。木地山にはかつての木地屋の集落があり、現在は二十軒近い家があり、小椋姓が多い。この集落の歴史は古く、四百年以上の歴史がある。近江国小椋庄の木地師を遠祖とするといわれている。美作の「木地師のふるさと」であるこの村には「木地師の館」が建てられている。木地師の歴史文化の伝承資料（文化財）や木地物の作品などが多く展示されているほか、現役の木地師数名による挽き物の製作指導も行われており、ここは伝統工芸を伝承する「聖地」となっている。

漆掻き(筆者)

右手峠の智頭町側の道筋に白坪という木地屋の集落がある。ここには、「聲高」という姓が多い。木地師の祖とされている「惟喬親王」の「惟喬（これたか）」に由来しているともいわれている。このほか、智頭側の木地屋としては、尾見木地屋、福原木地屋、大井谷木地屋、駒帰木地屋、新田木地屋、芦津木地屋、大屋木地屋、栃本木地屋、早野木地屋、宇波木地屋、智頭木地屋、上市場木地屋などがある。これらは、氏子駈帳の記録、墓碑、住居跡の遺跡によって確認されている。全国に散在している木地屋を管理するためにつくられた氏子駈帳は、木地屋の戸籍といってもいい。これによって全国の木地屋の分布を知ることができる。

漆器作品(筆者)

近江国君ヶ畑、蛭谷の巡回人(住職や神主および準ずる人)が五年から十年ごとに巡回し、木地屋の免許状の交付、往来手形、宗門手形、縁起書、御綸旨の付与をなし、僻地の木地師たちを慰撫激励したという。これによって、一定の奉賀金(上納金)を集め、それを君ヶ谷および蛭谷に祀られているお宮の修理などの費用にしていたとされる。右手の木地屋と智頭の木地屋は、右手峠を通って長年親密な行き来をしていたことがわかる。

志戸坂峠は、鳥取自動車道路が開通して京阪神との重要な幹線となっている。江戸時代には、参勤交代の行列がこの峠を越えていった。万葉時代も官吏がこの峠を越えて、都を行き交った。近世には、智頭は上方往来の宿場町として大いに栄え、因幡街道は、志戸坂峠を越えて大原、平福、そして江戸へとつながる大動脈であった。智頭と美作の人たちは、この街道を通して、物資も文化も婚姻も親密になされてきたのである。

漆に関する話だが、鳥取藩は漆木の植栽と漆液生産を保護奨励していた。智頭郷は漆の産地であり、その

中心は佐治町(現鳥取市)であった。智頭町の漆については、那岐地区、郷原地区には「漆掻き」の話が残っている(今はない)。木地師と塗師(漆塗りの職人)との関係は親密なものがあり、作東との関係はどうであったのか探ってみたい。

古来の出雲往来がある杉坂峠や参勤交代の万能峠、宮本武蔵ゆかりの釜坂峠なども訪ねて県境をまたいだ峠の文化圏の歴史に触れ、新しい交流が生まれるかなどいろいろと考えてみたい。

(鳥取県智頭町在住)

生け花　中田敏甫

# 短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力

# 俳句

## 夏茶碗

樽井悦子

手づくりの少し小さな夏茶碗
暑い日に友は次々花の國
無理をせず遠出の道にスミレ咲き
夕焼の青葉の中の碑(ひ)は光る
紫陽花の鉢よりこぼれ咲き競う

## 折々に

杉本幸子(土居)

昭和の日今日もコロナのニュースあり
草だらけ一本だけ咲くチューリップ
春愁やコロナニュース胸痛む
ひまわりや畑にあふれる笑顔かな
デイケアのカサブランカの香も高く

## 雨　風

沖田はるみ

手をそれて転がり止まぬ磴の毬
今様の種大前に春の宮
雨風の競ふて誘う夏落葉
梶一葉清めし硯星の棚
数へ日のかまどの煙今は無し

## 風　花

春名はるを

新涼を待ちつつ開く季寄せかな
秋時雨ここは播州一の宮
初明かり柏手を打つ手に届き
冬三日月雲のほどけて水に浮き
風花や石の地蔵の頬(ほお)に消ゆ

写真「後山にて」江見精治

## 風まかせ

豊田絢子

ふらここやふらりふらふら風まかせ
万緑にとけてしまふや子等と犬
宵闇や中有の兄に話しかけ
秋風や自在に木々を綾なして
明日もまたかくてありたし春立ちぬ

## 春の暮

尾崎千世

着脹れの昔笑ひし今我が身
七草やすなり言いえて粥(かゆ)すする
童女なる母の後追ふ春の暮
探梅や案内衆は地主らし
俎板をはみ出す魚や木の芽吹く

## 清水

坂井はつ子

清水のむ草の葉コップにこしらへて
ひなげしのオレンジ色の道をゆく
活けられし牡丹の前の席を占む
大粒の空豆うまし塩ゆでの
梅雨あがる空はこんなに青かりし

## 孫の目

山下三景

風鈴の音の隣に母の風
闇深しゆく先もなく蛍飛ぶ
孫の目に切り身の鰻焼けるかな
南瓜の重さや蔓の動かざり
七夕を孫の色紙で楽しめり

## 時　鳥

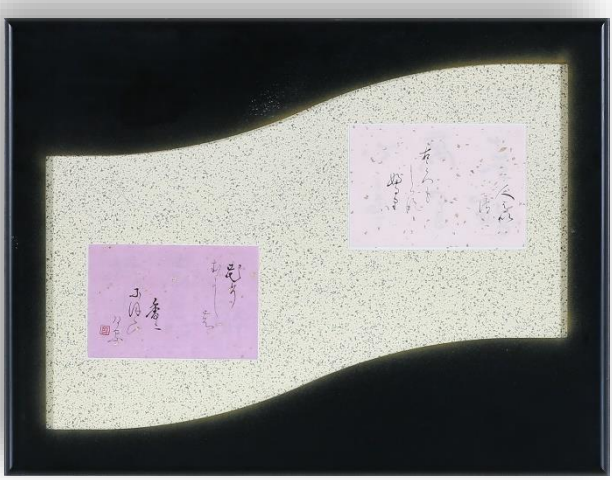
井口祥子

姿なく朝な夕なの時鳥
薄氷に猫辛(かろ)うじて水口に
大欠伸心安らぐ春炬燵
自粛から外に踏み出し風光る
靴下の穴のつくろい若葉雨

## 雁木坂

山本那実

椅子二つ空けて親しき秋団扇
どんぐりやひとりに長き丸太椅子
ここに来て風が地を這ふ節分草
堅香子や二百九段の雁木坂
葉桜や森家の墓所に馬の塚



書　花村智子

## 夢千代

小林友子

不揃ひの苺大福雛の客
夢千代も足湯につかる夏の月
山深く毒婦の化身鳥兜
冬鷺の天下取ったり石の上
蕺菜（どくだみ）や内に秘めたる母の愛

## しずり雪

菜穂

紅白の梅いり乱れ咲く空家
初蝶や過去が溶け出て光（カ）ゲとなる
朝早く命惜しむか蝉の声
松の葉になみだ一筋しずり雪
蒼天に大海のごと青田波

## 青芒

山本眞由美

初暦掛けて己の部屋とせり
子に習ふ折雛もいて雛祭
青芒空家となりてまだ三月
旱天の蓮池小さきカメラマン
助手席に母への土産熟柿かな

# 川柳

## 暮らし

影本　守

オリパラの灯火消すなとテレビ観る
希少価値土用の丑(うし)はどこへ行く
雷鳴がずしんと響き腰浮かす
畑にて草取り虫取り翔ぶ子たち
新種株もう出ないでと神頼み

## 時の怪獣

五反舎

スプレーの取っ手の消毒してくれよ
挨拶にワクチン注射のこと言わず
町コロナ里からイノシシ遁コロナ
シラサギよ俺にも食わせや川魚
七夕の節供のキュウリも怪獣に

# 短歌

## 金　魚

近藤美水

金魚三十匹群がりをりしに鷺の来て池の面
かなしく静まり返る

群がりて餌を食べゐたりし金魚三十匹鷺の
餌食となり果てにけり

諸もろの行事の仕来たり新しく作り替へた
りコロナ禍故に

## コロナ予防の注射

坂井はつ子

雨降れば家の前にて待てと言ふ電話のあり
ぬ「なれば受ける」と夫

夫と吾迎への車で雨の中コロナ予防の注射
を受けぬ

二回目の「コロナ注射」の様子をば自治会長
がたづねてくれり

## 女傑たち

中村千州代

道なくばわが拓かむと坂井女史は「歌会」立ち上ぐ「手作り」立ち上ぐ

新しき夜明け求めし女傑達平塚らいてふ・アウンサンスーチー

「牛飼が歌を詠む時」今まさに歌は興りぬわれら熟女にも

## 米寿となりぬ

宅美とみ子

山里を住めば都と思ふなり緑に囲まれ今日も生かされ

丑年に気が付けば我も米寿なりゆっくりのんびり暮らすも良いか

子に守られ孫に恵まれ曾孫まで居て丑年に我は米寿となりぬ

## 夫の腕

岡田仍子

美味いなと喜び呉るる人在るが炊事の励みと夫留守にて知る

ふつふつと湯気立つ鍋に顔寄せて笑顔が揃ふ今日の夕飯

わが足の杖となりくるる夫の腕に力を入れつつ坂道下る

## 今日もまた

平瀬芳子

今日もまた暑かったねと夫と言ふ日暮れの空は夕焼け小焼け

草花を葉書に描きて短歌添へ月並み送る病みゐる友へ

夕方の散歩の途中の畑に寄り野菜作りを教へてもらふ

## 友　よ

土井つゆ子

「あんた誰」で同窓会が始まりて恩師を囲みて童に戻る

自粛明けに「明日は暇か」と電話有りふたを開くれば七人集まる

夫と行く「グランド・ゴルフ」は唯一の巣籠り生活の息抜きなりけり

## 風の音

渋谷友香

笑み浮かべ円空仏はやさしかり我の内にもおだやかさもらふ

「心旅」日本縦断を自転車で峠をも越え入江から海へと

この時代宇宙も海も兵器満ち無人機はや何をか語らむ

ちぎり絵「さえずり」平田三代子

## ブラジルにて

島根和江

幼き日五色の沼があるといふ山をきはめてながめたる日よ

カヌーより入り江の蟹を眺むれば皆こち向きて笑ひをりたり

さやうならゴンドラゆれて目に見ゆるリオの港よまた会ふ日まで

## 願望

山下照夫

初孫に良き連れ添いのまかり来ぬ次に待たるるは曾孫の顔

荒れ狂うコロナウイルス何のその病みてどん底に落ち乍らでも

東京五輪のもとに綱もて引き寄せて世界はひとつよ努力素晴らし　（新仮名遣い）

## 昭和の歴史

福島美智子

「終活」も「墓仕舞ひ」などもこの国の行く先示す新たな言葉

荒れ果てた棚田は番地も名前もある祖父の開墾の昭和の歴史

空き家なる実家の時計は止まりゐて戻せぬ時間が長くなりゆく

## 料理する孫

丘野道子

ひい婆に教えられつつ米を砥ぐ小さなその手に大きな釜持ち

小麦粉をこねてはのばし真剣に孫が挑むは本格的ピザ

念入りに洗って切って鍋で煎りすり鉢で仕上げるいんげん胡麻和え　（新仮名遣い）

## 山路来て

須田紀秋

山路来て何やら床しき演奏会こげらのドラムに老鶯唄ふ

七年も耐へて羽化して恋をして蜩あはれ十日の命

吉野川の源見むと行者山苔むす岩間に大河の一滴

## 折々に

杉本幸子（土居）

昭和の日今日もコロナの二ユースあり速く終れと祈るばかりに

親つばめ巣を壊されて鳴き叫ぶ声の哀しや旋回続け

終息を待つコロナ禍や孫子にも逢えぬ辛さよ老いたる身には

（新仮名遣い）

## 孫の一日

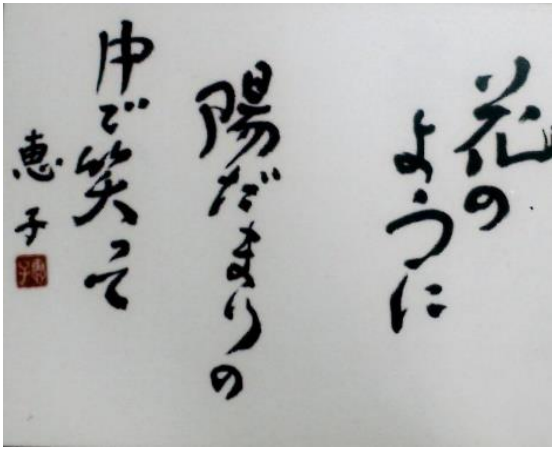
佐々木美奈子

はいはいの足どり軽ろくすすむ先キラリと光る日輪刀あり

笑みうかべさるのシンバルまねしてか両手をたたき愛想ふりまけり

離乳食みな食べ終わりその後はだっこされしまますやすや眠れり

（新仮名遣い）




書　長尾恵子

## 乾杯をする

山本美枝子

弁当をもちての田植ゑ稲刈りもこれで終はりか半世紀を経る

米作りは今年で終はると言ふ夫機械の掃除はなでやるごとし

去年より一俵多いと言ふ夫に冷酒を酌みて乾杯をする

## 宇　宙　人

和田眞佐子

閉ぢこもり訪ひ来るも無し電話も無し庭に来る雀よ身に沁む「一茶の句」

三箇月を「コロナウイルス」に閉ぢこもり隣りの鈴ちゃん多弁の二歳に

宇宙人よ彼方より来て「コロナ菌」絶滅の薬をスプレーして欲し

## 子供歌舞伎にお祭りに

名部みどり

清き瞳は一文字にひきしめてあどけなき歌
舞伎にみなしづまりぬ

花柄帯を「おたいこ」に結び媼らが乙女のごとくステージに並ぶ

能登香山より離れし南の武具山に名月浮びて村はお祭り

## 秋の風

鳥形多津枝

地に我が影空に想ひの雲流れ静かに暮るるは我が里なりけり

夏空が日毎に高くなりて来て夕吹く風は秋の匂ひする

古き物出しては広げ又しまひ広げて出して一日が暮れる

## たんぽぽの花

井上さかゑ

たんぽぽの黄の輝きは寒き日日をこもるわが身に一矢むくゆる

山桜のほころぶ木立に鳥の来て重なる囀り小枝をとび交ふ

八重椿は姿くづさず散り敷きて再びたのしむ紅の花莫莚

墨絵　垣内松枝

## 我がめぐり

松井洋子

幼日に噛みゐし「ズボ」の白き穂が風に揺れをり赤味を帯びて

金網の向かうに見ゆる真っ赤なる本苺あまた手には届かず

うろこ雲が空一面に広がりて見てゐる我は畑に一人

## ふるさと

末宗玲子

「ごうろ山」「馬場山」「えびす屋」「大還橋」ここは「江見」と言ふ私のふるさと

わが町のシンボルでありし片倉製糸の「エントツ」消えて幾十年ぞ

どの道を歩いてみても鶯の声聞こえ来るふるさとの道

生け花　春名由紀甫

## コロナ禍

黒石初江

野も山も日毎に色を増してゆくコロナ禍などに係りもなく

帰省して田ごしらへをば手伝ふとの息子の夢はコロナ禍に消ゆ

見たき物行きたき所多々あれど今はコロナ禍家に留まる

## 杉坂峠

入矢敏江

生臭くけものか臭ふ杉坂の荒れたる道に犬は動かず

文献に杉坂峠を繰りをればあれ肉ジャガが焦げつきにけり

雨あがる夜のさ庭のしめやかさ空にのみ風の音がしてゐて

## 夏に生まれて

浜田くに子

生れし日も入道雲の湧きゐしやわれを育てし八月の風

太陽はやんちゃ盛りの夏雲を今日も遊ばせ沈まむとする

谷水にくるくる西瓜の冷やされて昼寝の幼はやうやく目覚む

## 初咲き

日下智加枝

冬ばらは口開けぬまま色褪せぬ昼なほキンキンに凍れる庭に

あかぎれに膏薬を練りて入れてをりし祖母を笑へぬ吾となりたり

子に送る荷物の隅に入れて置く初咲きのしろいクリスマスローズ

## 散歩

新田千晶

継続は力なりとの教へをば守りつづくる朝の散歩よ

朝朝の散歩は我を早起きにさせ野山の草木を愛でよと誘ふ

早起きと歩く速度が今日の日の我の健康のバロメーターよ

絵手紙　木南節子

## あるがままに

豊田絢子

春日照る畑にひとたび出でたれば鋤き込むわれの影消ゆるまで

満開の桜は姿を止めずにこだはりを捨て只に散り果つ

しじまなる冬の星座を従へて月は限りなく冴えわたりたり

## 曾孫は二歳

小林洋子

退職に「ぢいぢお疲れ様でした」と動画の二歳「ニッコリ」一礼

老い三人の空間埋むる曾孫のお喋り仕種は笑みの泉よ

曾孫去り静けさもどりてゴム風船張りなく転がるうら淋しげに

## 侘び住まひに

角利津

侘びしらのわれを慰むと夜毎来る守宮は来ずや雨降る夜は

訪ふ人も無き九十一歳の誕生日日がな一日懐ふ来し方

針を刺すこの一瞬を待ちゐたり只待ちゐたり心萎えつつ

## 初夏

山下三景

時鳥早う起きよと谷に鳴く梅雨の寝床は重苦しくも

七年(ななとせ)を育ちし蟬よ一瞬に飛蝗の餌食になりてしまひぬ

奥山の溜め池守りて三百年現はるる底樋(そこひ)に手を合はしをり

## 空襲に遭ふ

三浦智江子

不気味なる音に迫りてＢ２９は焼夷弾を撒く街中に撒く

夜の空が昼の如くに赫赫し母の背で見る燃ゆる神戸の

空襲をのがれし陶の五段雛春夏秋冬われを見守らす

## 丑年にして

関内　惇

牛歩とも歩みきたりて気のつけばああダイヤモンド婚よ丑年にして

この先も牛の力を借り受けて岩戸を開かむ歌境を拓かむ

老いたりと雖も一歩を一歩をし踏み締め生きむ丑年にして

# グループ紹介

令和3年7月末現在

| | 場所 | 展示会等 | 作東文化協会会員 | | | 作東文化協会未加入者 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 作東地区内 | 作東地区外 | 子ども（中学生以下） | | |
| | 作東公民館<br>江見教室<br>美作アルコ<br>林野教室 | 白雲書道会展（作東美術館） | 12 | 13 | | 3 | 28 |
| | 講師自宅 | | 2 | | 25 | | 27 |
| | 月曜日：高本公民館<br>木曜日：角南公会堂<br>金曜日：<br>西町コミュニティ | | 5 | 1 | 20 | | 26 |
| | 講師自宅 | | 3 | | 16 | | 19 |
| | 作東農村環境改善センター | 春の絵画展（作東美術館） | 9 | 4 | | 3 | 16 |
| | 作東農村環境改善センター | 春の絵画展（作東美術館） | 6 | 4 | | 2 | 12 |
| | 土居公民館 | | 5 | | | | 5 |
| | 土居公民館 | | 5 | | | | 5 |
| | 地区センター（吉野） | 吉野郵便局展示 | 8 | | | | 8 |
| | 作東公民館 | | 5 | 1 | | | 6 |
| | 福山多目的集会所 | 福山 山の学校 | 7 | | | | 7 |
| | 作東公民館 | | 9 | | | | 9 |
| | 作東公民館 | お月見会・初釜 | 7 | | | | 7 |
| | 作東農村環境改善センター | プラザ展示（10月、3月） | 9 | 6 | | | 15 |
| | 粟井教育集会所 | プラザ展示（10月、3月） | 5 | | | | 5 |

# 作東文化協会

| 部名 | | グループ名 | 種別 | 代表者氏名 | 指導者氏名 | 例会 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 書道部 | 1 | 白雲書道会 | 書道 | 福井　正 | 山本千代子 | 月2～3回 | |
| | 2 | 阿部書道会 | 書道 | 真野みよ子 | 真野みよ子 | 月4回 | |
| | 3 | 書春名 | 書道 | 春名直子 | 春名直子 | 月3回 | |
| | 4 | 玲華書道教室 | 書道 | 末宗玲子 | 末宗玲子 | 月3回 | |
| 絵画部 | 5 | 作東水彩画教室 | 水彩画 | 妹尾美智子 | 関野智子 | 月2回 | |
| | 6 | 作東油彩画教室 | 油彩画 | 妹尾美智子 | 関野智子 | 月2回 | |
| | 7 | 土居水墨画 | 水墨画 | 岩本敏子 | 岩本敏子 | 月1回 | |
| | 8 | すみれ会 | 絵手紙 | 岩本敏子 | 岩本敏子 | 月1回 | |
| | 9 | ひめっ子クラブ | 絵手紙 | 小坂田千恵美 | — | 月1回 | |
| | 10 | 江見ちぎり絵教室 | ちぎり絵 | 唐内治美 | 杉本幸子 | 月1回 | |
| | 11 | 福山ちぎり絵教室 | ちぎり絵 | 下山美好 | 杉本幸子 | 月1回 | |
| 茶華道部 | 12 | ひまわりの会 | 華道 | 中田敏子 | 中田敏甫 | 月2回 | |
| | 13 | 茶の湯同好会 | 茶道 | 谷本　津多江 | 谷本津多江 | 月2回 | |
| 文芸部 | 14 | あがた川短歌会 | 短歌 | 濱田くに子 | 関内　惇 | 月1回 | |
| | 15 | 能登香短歌会 | 短歌 | 松井洋子 | 関内　惇 | 月1回 | |

# グループ紹介

令和3年7月末現在

| | 場所 | 展示会等 | 作東文化協会会員 | | | 作東文化協会未加入者 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 作東地区内 | 作東地区外 | 子ども（中学生以下） | | |
| | 福山山の学校 | | 10 | | | | 10 |
| | 作東公民館 | | 8 | | | | 8 |
| | 作東公民館 | | 7 | 6 | | | 13 |
| | 作東総合支所会議室 | | 6 | 2 | | | 8 |
| | 吉野公民館 | | 5 | 2 | | | 7 |
| | 作東公民館 | | 4 | 5 | | | 9 |
| | 作東公民館 | | 7 | 8 | | | 15 |
| | 粟井・江見・竹田・土居・吉野各地区 | | 20 | | | | 20 |
| | 作東公民館 | | 7 | 5 | | | 12 |
| | 旧粟井小学校音楽教室 | | 6 | | | | 6 |
| | 山本津多江宅 | | 3 | | | | 3 |
| | 作東老人福祉センター | | 16 | | | 29 | 45 |
| | 旧粟井小学校 | | 5 | 1 | | | 6 |
| | 作東公民館 | | 6 | 4 | | | 10 |
| | 作東公民館 | 青葉祭、節分祭、宝妙寺 | 13 | 5 | | | 18 |

# 作東文化協会

| 部名 | | グループ名 | 種別 | 代表者氏名 | 指導者氏名 | 例会 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 文芸部 | 16 | 山家川俳句会 | 俳句 | 春名貞和 | 春名はるを | 月1回 | |
| | 17 | 作東川柳同好会 | 川柳 | 福嶋完治 | — | 2ヶ月に1回 | |
| 歴史部 | 18 | 作東歴史地名研究会 | 地名研究 | 新田祐之 | 会員相互研修 | 月1回 | |
| | 19 | 古文書を読む会 | 古文書 | 真野みよ子 | グループ内交替制 | 月1回 | |
| 芸能部 | 20 | 吉野ハピネス | 大正琴 | 小林珠枝 | 富永仁美 | 月2回 | |
| | 21 | あずさの会 | 大正琴 | 岩本敏子 | 藤谷守 | 月1回 | |
| | 22 | 作東しののめ会 | 大正琴 | 岩本敏子 | 藤谷守 | 月1回 | |
| | 23 | 作東吟詠愛好会 | 吟詠 | 光辻猛美 | 光辻猛美 | 月2回 | |
| カラオケ部 | 24 | 作東カラオケ同好会 | カラオケ | 内田孝子 | 土屋博司 | 月4回 | |
| | 25 | 粟井カラオケ同好会 | カラオケ | 松本満寿子 | — | 月2回 | |
| 工芸部 | 26 | むつみ会 | ちぎり絵外 | 山本津多江 | 山本津多江 | 月1回 | |
| 棋道部 | 27 | 双山囲碁クラブ | 囲碁 | 横山廣志 | 横山廣志 | 年2回 | |
| 情報映像部 | 28 | お達者ねっと倶楽部 | インターネット | 鳥形初美 | — | 月2回 | |
| 手芸部 | 29 | ビーズを楽しむ会 | 手芸 | 野村啓子 | 西坂暁子 | 月1回 | |
| | 30 | 手芸編物教室 | 手芸 | 原田豊子 | 原田豊子<br>野村啓子 | 月4回 | |

## 令和２年度　作東文化協会事業実績報告

### 【全　体　事　業】

| 年 | 月 | 日 | 事　業　名 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|
| 2 | 4 | 17 | 第1回理事会 | 年間事業計画・会員募集・文化誌「作東の文化」(第46号)発刊<br>・視察研修について |
| | 5 | 12 | 第1回文化誌<br>編集委員会 | 編集委員長の選任・編集の基本方針・編集内容・原稿募集<br>・編集日程について |
| | | 19 | 第2回理事会 | 会員募集・文化誌「作東の文化」(第46号)・視察研修<br>・専門部グループ調査について |
| | | 19 | ― | 会員募集開始 |
| | 7 | 3 | 視察研修 | 西大寺・長船方面 |
| | | 31 | ― | 会員募集〆切、グループ調査〆切 |
| | 8 | 3 | 第2回文化誌<br>編集委員会 | 応募原稿や画像の応募数確認・種類別仕分作業<br>応募原稿の校正作業について |
| | | 19 | 第3回文化誌<br>編集委員会 | 印刷原稿の校正作業 |
| | 9 | 9 | 第4回文化誌<br>編集委員会 | 印刷原稿の校正作業 |
| | 10 | 6 | 第3回理事会 | 文化誌「作東の文化」（第46号）配布・活動費受渡 |
| | | 24～25 | 秋の文化展 | 秋の文化展(B&G海洋センター) |
| 3 | 1 | 12 | 臨時理事会 | 春の文化展・芸能発表会・総会について |
| | | 29 | ― | 支部・専門部事業実績報告と事業計画書提出〆切日 |
| | 2 | 10 | 第4回理事会 | 令和2年度総括 |
| | 3 | 27～28 | 春の文化展 | 作品展示(作東バレンタインプラザ東側スペース<br>・美作市立作東文化芸術センター美術館) |
| | | | 【同時開催】<br>第16回芸能発表会 | 【同時開催】第15回芸能発表会<br>27日リハーサル・28日本番(作東バレンタインプラザ) |
| | | 28 | 令和3年度<br>作東文化協会総会 | (作東バレンタインプラザ) |

※赤字は感染症予防のため中止

## 令和２年度　作東文化協会事業実施報告

### 【支　部　活　動】

| 部　　名 | 年 | 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|
| 江見・豊野支部 | 2 | 5 | 26 | 江見・豊野支部合同評議員会の開催 |
| | | 10 | 6～15 | 「作東の文化」誌会員に配付 |
| 土居支部 | 2 | 6 | 3 | 第1回評議員会(決算報告・会員募集) |
| | | 10 | 8 | 第2回評議員会(文化誌の配付) |
| 福山支部 | 2 | 6 | — | 会員募集 |
| | | 10 | — | 文化誌配付 |
| 粟井支部 | 2 | 6 | 1 | 評議員会 |
| | | 10 | 14 | 評議員会 |
| 吉野支部 | 2 | 6 | — | 会員募集 |
| | | 10 | — | 文化誌配付 |

## 令和２年度　美作市文化連盟事業報告

### 【連　盟　事　業】

| 年 | 月 | 日 | 事　業　名 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|
| 2 | 4 | 23 | 美作市文化連盟第1回運営委員会(総会) | 作東総合支所 |
| | 6 | 7 | 美作市文化連盟第13回芸能発表会 | 美作文化センター |
| | | — | 美作市囲碁連盟第26回美作市囲碁大会 | 作東農村環境改善センター |
| | | 15 | 美作市カラオケ連盟第11回発表会 | 英田公民館 |
| | | — | 美作市囲碁連盟第27回美作市囲碁大会 | 作東農村環境改善センター |
| | | 22 | 美作市吟剣詩舞道連盟第14回発表会 | 英田公民館 |
| | 12 | — | 日本舞踊連盟第11回発表会 | 美作文化センター |
| 3 | 1 | 25～31 | 美作市文化連盟第8回作品展 | 美作市立作東文化芸術センター美術館 |

# 令和２年度　作東文化協会事業実施報告

## 【専門部活動・1】

| 部　名 | グループ名 | 年 | 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|---|
| 書道部 | 白雲書道会 | （定例） | | | 月2～3回開催江見教室11月休会 |
| | | | | | 月2～3回開催林野教室11月休会 |
| | | 2 | 9 | 4～6 | 白雲書道会展（作東美術館） |
| | 阿部書道会 | （定例） | | | 毎週月～金開催　川崎教室 |
| | | 2.12月～3.1月 | | | ミニ展覧会（会員と保護者観覧） |
| | 書　春名 | （定例） | | | 月3回3ヶ所開催（木曜・金曜・月曜）　7月休会<br>角南公会堂、西町コミュニティ、高本公民館 |
| | 玲華書道教室 | （定例） | | | 月3回開催　書道教室5，6月休会 |
| 絵画部 | 作東水彩画教室 | （定例） | | | 月2回開催9，11，12，1月休会 |
| | | 2 | 5 | 3～6 | 春の絵画展（作東美術館） |
| | | 3 | 2 | ― | 湯郷を描く展覧会出品（湯郷地域交流センター） |
| | 作東油彩画教室 | （定例） | | | 月2回開催 |
| | | 2 | 5 | 3～6 | 春の絵画展（作東美術館） |
| | | | 9 | ― | 県展出品 |
| | | | 11 | ― | しんわ美術展出品（アルネ津山） |
| | | 3 | 2 | 6～14 | バレンタイン愛の美術展出品<br>（美作市立作東文化芸術センター美術館） |
| | | | 2 | ― | 湯郷を描く展覧会出品（湯郷地域交流センター） |
| | さつき会 | （定例） | | | 月2回開催6月～3月休会 |
| | 土居すみ絵 | （定例） | | | 月1回開催4月～3月休会 |
| | | 31 | 4 | ― | 作東バレンタインプラザ東側展示 |
| | すみれ会<br>（絵手紙） | （定例） | | | 月1回開催4月～3月休会 |
| | | 31 | 4 | ― | 作東バレンタインプラザ東側展示 |
| | こぶしの会 | （定例） | | | 月2回開催4～3月休会 |
| | 吉野ひめっ子クラブ | （定例） | | | 月1回開催（吉野地区センター）　吉野郵便局展示 |
| | 江見ちぎり絵教室 | （定例） | | | 月1回開催（4～12月、2，3月） |
| | | 2 | 12 | ― | 教室　江見・福山合同開催 |
| | 福山ちぎり絵教室 | （定例） | | | 教室月1回開催（4～11月、2・3月）<br>さくとう山の学校展示（定期的） |
| | | 2 | 12 | ― | 教室　江見・福山合同開催 |

# 令和２年度　作東文化協会事業実施報告

## 【専門部活動・2】

| 部　名 | グループ名 | 年 | 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|---|
| 茶華道部 | ひまわりの会 | （定例） | | | 月2回開催（作東公民館）4，5月休会 |
| | 茶の湯同好会 | （定例） | | | 月2回開催（作東公民館） |
| | | 2 | 9 | — | お月見茶会 |
| | | 3 | 1 | — | 初釜 |
| 文芸部 | あがた川短歌会 | （定例） | | | 短歌会　毎月第1月曜日13：30～開催4，5月休会 |
| | | 2 | 10 | — | プラザ展示 |
| | | 3 | 3 | — | プラザ展示 |
| | 能登香短歌会 | （定例） | | | 月1回開催（第4金曜日） |
| | 山家川俳句会 | （定例） | | | 月1回開催（第４土曜日作東山の学校） |
| | 作東川柳同好会 | （定例） | | | 偶数月例会開催（作品発表と内容検討）<br>兼題＝4月　春・めずみ　　6月　雨・かび<br>8月　生きる・花火　10月　萩・コロナウィルス<br>12月　霜・鍋　　2月百円均一・暦 |
| 歴史部 | 歴史地名研究会 | （定例） | | | 月1回開催4，5月休会 |
| | 古文書を読む会 | （定例） | | | 毎月第3金曜3グループに分かれての共同学習開催 |
| 芸能部 | 吉野ハピネス | （定例） | | | 月2回開催4月～3月休会 |
| | 琴伝流大正琴<br>あずさの会 | （定例） | | | 月1回開催4，5，11，12，1月休会<br>（第2木曜日※8・9・10月は第１木曜、） |
| | | 2 | 6 | — | 美作市文化連盟芸能発表会出演 |
| | | | 10 | — | 岡山県大会出演 |
| | | 3 | 3 | 28 | 作東文化協会第16回芸能発表会出演 |
| | 作東大正琴<br>しののめ会 | （定例） | | | 月1回開催4～3月休会 |
| | | 2 | 6 | — | 美作市文化連盟芸能発表会出演 |
| | | | 10 | — | 岡山県大会出演 |
| | | 3 | 3 | 28 | 作東文化協会第16回芸能発表会出演 |
| | 作東吟詠愛好会 | （定例） | | | 各支部（地区）月2回開催4～3月休会 |
| | | 3 | 3 | 22 | 作東文化協会第16回芸能発表会 |
| | コール作東 | （定例） | | | 月2回開催4月～3月休会 |
| | | 3 | 3 | 28 | 作東文化協会第16回芸能発表会 |
| | （全体） | 2 | 11 | 10 | 芸能部役員会 |
| | | 3 | 3 | 28 | 作東文化協会第16回芸能発表会 |

## 令和２年度　作東文化協会事業実施報告

### 【専門部活動・3】

| 部　名 | グループ名 | 年 | 月 | 日 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|---|
| カラオケ部 | 作東音楽同好会 | （定例） | | | 月曜日　月4回開催 |
| | | | | | 水曜日　月4回開催 |
| | | | | | 木曜日　月4回開催 |
| | | 2 | 6 | — | 美作市カラオケ連盟発表会出演 |
| | | | 11 | — | 美作市カラオケ連盟発表会出演 |
| | 粟井カラオケ同好会 | （定例） | | | 月2回開催1，2月休会 |
| | | 3 | 3 | 28 | 作東文化協会第16回芸能発表会 |
| 工芸部 | むつみ会 | （定例） | | | 月2回開催4月～3月休会 |
| 棋道部 | 双山囲碁クラブ | — | | | こども囲碁教室休会 |
| | | 2 | 8 | — | 双山囲碁大会 |
| | | 3 | 2 | — | 双山囲碁大会 |
| 情報映像部 | お達者ねっと倶楽部 | （定例） | | | 毎月第1・3火曜日<br>インターネット講習会（リモート開催含む） |
| 手芸部 | ビーズを楽しむ会 | （定例） | | | 月1回開催 |
| | 手芸編物教室 | （定例） | | | 月4回開催 |
| | | 2 | 6 | — | 青葉祭（宝妙寺） |
| | | 3 | 2 | — | 節分祭（宝妙寺） |

写真「ガクアジサイ」井口満春

# 作東文化協会会則

（名　称）

第一条　本会は作東文化協会と称する。

（目　的）

第二条　本会は作東の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

（事務所）

第三条　本会の事務所は美作市教育委員会作東分室内におく。

（事　業）

第四条　本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

一　講演会・研修会・展覧会等の開催。

二　文化誌などの発行。

三　その他文化の推進に関する事業。

（会　員）

第五条　第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する個人を会員とする。

（組　織）

第六条　本会に部及び支部をつくることができる。

一　部は、書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・工芸・芸能・カラオケ・棋道・情報映像・手芸とする。

二　支部は、江見・豊野・土居・福山・粟井・吉野とする。

（役　員）

第七条　本会に次の役員をおく。

会長一名、副会長二名、理事、部長、副部長、支部長、評議員若干名、監事二名

（役員の任務）

第八条　一　会長は会を代表し会務を統括する。

二　副会長は会長を補佐し会長に支障があった場合は会務を代行する。

三　理事は会をつかさどる。

四　部長は部を統括し副部長は部長を補佐する。

五　支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。

六　評議員は運営について協議する。

七　監事は会計を管理する。

（役員の選出）

第九条　一　会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。

二　監事は総会において選出する。

三　理事は部長・副部長・支部長をもってあてる。

四　部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。

五　評議員は部長・副部長・支部長が推薦し理事会において選任することができる。

六　任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

（事務局担当者）
第十条　事務局担当者は会長が委嘱する。
（役員の任期）
第十一条　一　役員の任期は二年とする。ただし再選を妨げない。
二　任期中の補充役員の任期は前者の残任期間とする。
（顧問及び参与）
第十二条　本会に特別顧問・顧問及び参与をおくことができる。特別顧問・顧問及び参与は総会の同意をえて会長が委嘱する。
（会　議）
第十三条　一　総会は毎年一回開催することができる。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。
二　評議員会を以って総会に代えることができる。
三　理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。
（経　費）
第十四条　本会の経費は会費・補助金・市よりの事業委託料・その他をもってあてる。
一　会員は年額一口一，〇〇〇円の会費を納入するものとする。
（会計年度）
第十五条　本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。
（会則の改正）
第十六条　この会則は、総会の決議により改正することができる。
（付　則）
一　この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。
二　平成十年三月二十九日会則一部改正　平成十年四月一日より施行する。
三　平成十一年三月二十一日会則一部改正　平成十一年四月一日より施行する。
四　平成十四年三月二十四日会則一部改正　平成十四年四月一日より施行する。
五　平成十七年三月二十一日会則一部改正　平成十七年四月一日より施行する。
六　平成二十年三月二十八日会則一部改正　平成二十年四月一日より施行する。
七　平成二十一年三月二十二日会則一部改正　平成二十一年四月一日より施行する。
八　平成二十八年三月二十七日会則一部改正　平成二十八年四月一日より施行する。

# 編集後記

◆災害文化という言葉があります。衛生災害の「コロナ禍」は、我が国災害史上の大災害の一つといえましょう。「新型コロナウィルス」「陽性者数」「緊急事態宣言」「テレワーク」「巣ごもり」「ＰＣＲ検査」「ワクチン」「デルタ株」「医療崩壊」「在宅コロナ患者」「オンライン診療」等々の災害用語に加え、イベントが開催できない、子供と遊びに行けない、飲みに行けない、子供の帰省がないといった暮らし（避難生活）が農山村でも早や二年を迎えます。

◆語りたい、伝えたいと思っている方々にその機会を提供するのが本誌『作東の文化』ですから、編集子はコロナ禍の中にあってこそ本誌の出番ではないかと考えました。春名貞和前会長からもこの考えにご賛同いただき、会員や新会員の方に「所感寸言」「随筆随想」「歴史紀行」への寄稿をお勧めしてみると、書ける方、書きたい方、書いておきたいと考えている方などが多いことが分かりました。そして、沢山の玉稿が寄せられたのです。

　本号は、常連の方のほか大勢の新規寄稿者によるバラエティーに富んだ内容となり、素晴らしい文化誌が完成しました。

◆作東文化協会のグループ活動は文化継承が命であり、活動は発表（展示）を目標とします。そこで、コロナ禍対策を講じて「展示」を主体とする「秋の文化展」の開催を決めました。作東美術館やバレンタインプラザに会場を設営し、絵画、生け花、書道、木工芸、写真などを展示しますが、展示作品の一部は本誌のカットを飾っています。

◆文化は、無限の広がりと深さがあり共有財産です。『作東の文化』の使命は、作東に暮らす老若男女の貴重な「記録財産」を富ますことでもあります。農山村文化の醸成に努め、文化する人々の底辺を広げることが私たちの使命です。

　しかるに、子どもたちの文化力の向上も大切です。「子供の頃のボランティア体験が大人の人格をつくる」といいます。歴代の協会会長が「将来の作東の文化人を育てたい」と語ってこられましたが、小中高生たちに「青春の記録」として文化誌に参加していただける努力をするなど、これからも私たちは先人たちの夢を追い続けたいと思います。

◆会員の皆さまには、今後とも『作東の文化』に気軽に

ご寄稿いただければ幸いです。私たちも誌面を充実させることで、先人たちの思いに応えてゆきたいと思います。

最後に、本誌制作にご協力いただいた会員の方々や支部長・評議員の方々に心から感謝申し上げますとともに、皆さまが元気なお顔の日々を過ごされるようお祈り申し上げます。

編集委員一同

作　東　の　文　化

第47号

令和3年10月1日発行

編　　集　作東文化協会文化誌編集委員会
（美作市教育委員会社会教育課）

編集委員　鳥形　初美　谷口　重人　中田　敏子
新田　祐之　山本　直人　真野　みよ子
春名　貞和　山本　進一郎　妹尾　美智子
山下　亨

発　行　所　作　東　文　化　協　会
岡山県美作市教育委員会　社会教育課
〒709-4234　岡山県美作市江見945
TEL（0868）72-2900
HPアドレス　http://bunka.boo.jp/

印　刷　所　株式会社ウイル・コーポレーション
〒924-0051石川県白山市福留町370
URL　https://well-direct.com/